俺が正義でお前が悪で

あらた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺が正義でお前が悪で

【Ｎコード】
Ｎ０６５１Ｕ

【作者名】
あらた

【あらすじ】
石橋奏人は平凡な高校生。
ある日突然、幼馴染みの結衣と再会したかと思ったら、なんか急に魔王がやって来たー！
さらに魔王を追って勇者様もキターー！
優しく強い魔王様と貪欲で派手な勇者様。
世界が変われば正義も変わる！？
ただの学園恋愛ストーリーを通り越して非日常な人たちに巻き込まれ変わっていく奏人の日常。

そんな青春の一ページなお話。

第1頁　魔王様キター！！（前書き）

ずっとスタンバってました（´Д`）。新作、どうぞ宜しくお願い致します！！

第1頁　魔王様キター！！

「これで終わりだぁあ！！」
大きな剣を振りかざし黒く巨大な闇に男は立ち向かっていく。
圧倒的な力の差を気力で乗りきり、奴を追い詰めた。
最後の一撃にすべてを賭け男は飛び上がる。
対峙するもう一方は、黒い影を体から吹き出しながら、自分が悪の王に生まれてきたことを悔やみ、目を瞑る。
「魔王様！」
最後の瞬間、魔王配下の魔導師が何かを呟きながら体を寄せてきた。
魔王と魔導師に電撃が走る。
みるみるうちに二人の体は闇に溶けて消えていった。

例えば異次元ファンタジー。
全く知らない世界に突然召喚されて、それでもってなんかかわいい妖精みたいなのが、貴方は伝説の勇者です！魔王にさらわれた姫とこの世界を救ってください！
とか言われて、元の世界に帰るために、はたまた正義を貫くために戦い勝利する。
そして、日常を取り戻す。
「日常ね…平凡が一番だよな」
光陵学園高校からの帰り道、石橋奏人は友人に借りていたライトノベルを閉じ、眼鏡を指で押し上げた。
「まあ、その妖精か、お姫様が折笠さんだったら考えてしまうかな…」
昔、奏人が小さい頃に隣に住んでいた、折笠結衣のことをふと思い出す。
家までの近道となる幸寄神社の境内へ足を踏み入れた。

広いとは言えない境内の社の前では数人の子供たちが鬼ごっこをしている。
昔、結衣とここで一緒によく遊んだなと、感慨に耽ってしまう。
降りようとした石段に一人の女の子が顔を伏せ泣いている。
どうやら仲間に入れてもらえなくていじけているのかと、奏人はその少女の横に座った。
「いいだろ、この景色」
半ば独り言のように、そこから見える景色に目を細める。
山の中にある高校から少し下ったところにひっそりと存在する神社。
木々に囲まれながら真っ直ぐ伸びる石段からは奏人たちの暮らす町と、その町の先にどこまでも広がる真っ青な海がよく見渡せた。
奏人はこの見晴らしが好きだった。
「自分がちっぽけに見えるだろ？」
そう言って少女の方を振り向くと、その姿はすでに無く、境内の方から少女の声が聞こえてきた。
「変態に声かけられたー逃げろー」
「はっ！？」
「きゃーっ」
声が響くと一斉に散り散りになる子供たち。
あっという間に人の気配が無くなり、奏人だけがぽつーんと残された。
「なんなんだ…」
なんだか寂しい気持ちになり、肩を落とし一歩踏み出したとき、背後に誰ががいる気がした。
「奏人くん？」
懐かしい声。
振り返るとそこには小学五年の時に転校していった、折笠結衣の姿があった。
間違いなかった。
あの頃の記憶が鮮明に甦る。

同じ学園のセーラー服に活発な短い髪を風になびかせ笑顔で手を振った。
「ゆ、い…お、折笠…さん？」
「やっぱりメガネのかなとくん！！久しぶりだね！？お兄ちゃんになっちゃって！」

結衣が機嫌良さそうに奏人の前に歩いてくる。
小さな顔の中に大きい瞳にピンク色の唇。
マンガのヒロインの様な少女がだんだん近づいてくる。
昔のままに違いはないがしばらく会わない間に一層可愛くなったように感じた。
「同じ年だろ…」
負い目があるわけではない。
だが何故か足が後ろへ…
「うわっ！！」
舞い上がっていたのか、ここが階段であることを忘れ足を踏み外した。
「かなとくん！」
結衣の叫びも自分の体が落ちる速度も何十倍も遅く感じた。
終わりはこんなものなのか…
最後に結衣に会えてよかった…
目を瞑る。
何も聞こえなくなってきた。
もう、身を委ねるしかない。
ピリピリッ
体に電気のようなものが走った気がした。
この世界との決別を体感しているのか。
ビリビリ
「いでぇ～っ！」
いや、これは…

はっきりいって別の何かの事件に巻き込まれたようだった。
身体中が焦げるような激しい激痛が奏人を包む。
「うがっ！！」
「うぐっ！！」
「うきゃっ！」
石段に落ちる衝撃ではなく、なにかに受け止められた、というよりかはぶつかって、そのまま転がり落ちる。
「かなとくん！」
目を恐る恐る開く。
真っ暗だった。
その辛うじて見える隙間から結衣が石段をかけ降り近づいてくるのが見える。
スカートをヒラヒラさせながら。
「あ、パンツ…」

ずっとこのままでいたかったが生きているのか、手を動かす。
きちんと動いた。
自分がなにかの布のようなものに包まれているとわかった。
そして柔らかなクッション。
「助かったぁ～」
体にかかる布をどかし、クッションに顔を埋める。
「いやんっ」
クッションが可愛らしい声をあげた。
そんなわけがない。
目を見開いてよく見ると、それは大きな柔らかい、胸だった。
体をたどりその物体の持ち主を見る。
「私の体は魔王様だけのものよん！」
ふわふわの黄色い髪にこれまた大きくつり目ぎみの瞳、額になにかの模様がかかれた、女の子がほほを赤くして奏人を見つめる。

しばらく沈黙が続いた。
「かなと…くん？」
心配している声とはほど遠い結衣の震える声が沈黙を打ち砕く。
「うわぁぁぁ～！！」
奏人は全身から湯気を吹き出し、慌てて少女の胸から手を離し後ろに転がり込んだ。
「ご、ごっごっ誤解です！！」
拳を握り眉間にシワを寄せる結衣に向かって何故か土下座を繰り返す。
「もう、いいよ…かなとくんが無事だったんだから！で、誰？」
結衣も奏人の一部始終を見ていたので、突然現れたその少女に対して怒りを露にすることはなかった。
真っ黒な布の上にちょこんと座り込み指を口に当て辺りを見回す少女のその姿もまた、マンガの世界から飛び出してきたようだ。
「あのぉ…ここ、どこですかぁ？魔王様は？」
「は？」
「まおう？」
聞きなれない台詞が何事もないように口からこぼれた。
膝の砂をはたきながら立ち上がると、その少女の服装がかなり奇抜でどこで手に入れたのか気になってしまう物であることに気をとられる。
ふと、結衣を見ると、携帯電話を慌てて開いている。
それが賢明だ。
きっと転がり落ちたショックで記憶が飛んでいるのだ。
救急車を呼ぶのだな。気が利くイイコだな…
結衣に対してまたまた気持ちが上がったとき。
カシャッ
「すごい、クオリティー高いですね！！なんのコスプレですか！！この額のペイントはどうやって書いてるんですか！！これ、地毛ですか？」

結衣の携帯カメラからはシャッター音が鳴り響き、奇抜な服装の少女を関心と羨望の眼差しで上から下までいじり倒していた。
「えぇぇ～！！」
まさかの結衣の行動につい叫ぶ。
「あなたさっきから何をしてるの？魔王様はどこにいらしゃるの！？」
少女を撮りまくる結衣に黒いマントの上でポーズを取りながら辺りをキョロキョロと見回す少女。
なんか踏み入れてはいけない世界なのかもしれないと思いながら、奏人は少女の足元に目線をやる。
「…あの、ま、まおうというのかはわからないけど…」
全貌の見えている奏人が落ち着きを取り戻し、口を開いた。
そして少女の足元を指差す。
「さっきから下にふんずけてるその人のことでは？」
「は！？」
すべての視線が真っ黒な布、いや、マントに包まれた人物に注がれた。
「魔王様～ご無事ですかぁ！？」
さっきまで踏んずけていたことを、なかったかのように少女は下敷きになり伸びている人物の胸ぐらをつかみ激しく揺する。
「うぅ…マリーか…」
「あぁ魔王様！！ご無事で何よりです！！」
「無事？と言うことは、助かったのか？」
「えぇ…」
「そうか…」
一通り不思議な会話を済ませた二人は、辺りを見回した。
「で、ここはどこだ？」
「うわ…」
奏人はつい感嘆の声をあげてしまった。
美しい顔というのはテレビや雑誌の中だけだと思っていたが、実際

に目の前にその姿を確認するとつい声が出てしまうものなのか。
魔王と呼ばれている青年が立ち上がる。
長身に、これまた奇抜なデザインの、黒を基調とした衣装のような服。
風にバザバサとなびく黒いマント。
黒い色がその男の整たんな顔立ちをより引き立てているようだった。
「君は？」
キリッとした眉にどことなく憂いを帯びた優しい瞳が奏人を見つめた。
「う…」
言葉につまる。
「失礼した。人に名を訪ねるときは自分からだな」
男は襟をただしながらこつこつとブーツのそこを鳴らしながら奏人の目の前に立ち止まった。
「私は悪の大魔王だ」
奏人の頭の中が真っ白になった。

第1頁　魔王様キター！！（後書き）

読んでいただいてほんとにありがとうございます！！

次回はアイツが登場します（＾＾ゞ

第2頁　勇者様キター！！（前書き）

はい、ヤツが登場します。登場するだけです…
今回は、なんか憎めない魔王様を見守ってください。

第2頁　勇者様キター！！

「かなとくん、さっきの二人、付いてきてるんだけど…」
奏人と結衣の後ろでなり響く固い靴音とマントがなびく音。

折笠結衣が後ろを見ないように奏人に寄り添って小さな声で呟く。
「気のせい…こっち側に用があるんだよ…」
関わってはいけない。
そう感じて結衣を引っ張り、彼らから逃げたつもりだった。
しかし、何故だか放っておいてもいけない気がした。
意を決して立ち止まり、怪しげな二人へ顔を向けた。
「あの！！」
「なっ！」
真っ黒い男がいきなりの事に身構える。
「ま、まお、うさんはこちらに用事がおありで？」
「…」
魔王は一度うつ向くが、すぐに顔をあげ奏人を見る。
「…気に…してくれるのだな。なんと言う心遣い。マリーよ！いいところへ召喚してくれたな」
まおう。その響きとは似つかわしくない優しい眼差しが返ってきた。
「えぇ！！一度きりですけど」
マリーがにこにこ笑顔で魔王を見上げる。
「そうなのか！？」
「あの～」
「あれ、すんごい魔力使うんですよ！しばらくは私なにもできませんよ」
「…まあ良い。素晴らしいところな気がする。ここならやつも来まい」
「あの～っ！！」

電波の飛び交う会話を遮るため、奏人は声を張り上げた。
「どうしたメガネ！？」
「メガネ！？」
奏人のメガネが一瞬ずり落ちるが指で直し、冷たい視線を送る。
場の空気を読んだのか、魔王は眉を寄せた。
「あぁ…すまん、貴様の名前を知らぬものでな…」
「貴様って…い、石橋奏人です！！」
また貴様などと呼ばれては血管が切れそうな気がしたので諦めて名乗った。
「イシバシカナト！？なんと言う酔狂な名前だ！！」
魔王は何故か感動している。
「酔狂！？」
だが奏人はさらに傷付いた。そりゃ声も裏返る。
「イシバシカナトは何ができるのだ？魔法は使えるのか？手ぶらと言うことは剣士ではあるまい？」
魔王は興味津々に奏人を上から下まで眺める。
「なんか、オレ、泣きそうなんですけど…」
「かなとくん！！負けないで！！」
結衣が奏人の手を掴んで微笑む。
体温が一気に上昇するのがわかった。
気持ちが入る。
「あの、イシバシカナトはフルネームで、名前は奏人なんで、奏人でいいです！あと、オレは魔法も剣も使えません！て、いうか使ったこともないし、この世界では必要ないんです！！だいたい、俺の最初の質問聞いてました？後をつけられているみたいで嫌なんですけど！！」
勢いに任せて一気に話す。息が切れたがおかまいなしだ。
吐き出して少しスッキリとした。
「ちょっとあなた！！魔王様に何て口を！」
「…」

突然マリーが肩を震わせ奏人に近づきネクタイを掴んだ。
「うがぁ～死ぬ～」
激しく揺すられ、顔面蒼白になりながらふと、魔王にめをやった。
「マリーよ、やめるのだ…」
力なく呟く。
その姿は魔王というイメージとはやはりかけ離れていた。
ゆっくりと奏人の前に歩いてくる。
真っ黒い物体は目の前にすると迫力があり、奏人は一歩あとずさんだ。
「カナトよ。突然現れ、迷惑をかけた。だが我々にはこの世界に知り合いもおらぬ。心細かったのだ。すまなかったな。だが、お前は我々を信じてくれた」
「え、いつ信じましたか！？」
「いま、『この世界には』と、言っておっただろう」「うっ…」
あれだけの出来事と、この二人を見て、どこかで、認めていたのかと思うと恥ずかしくなった。
「カナト…この世界で頼れるのは貴様しかおらんのだ…」
魔王のその瞳は力強い。
しかし、何故か淋しさを感じた。
「つ、つまり、僕らのあとをつけてたんですね？」
「当たり前だろ。気づかなかったわけではなかろう？」
魔王はやれやれといった表情を向けてきた。
「自分で言わないでください！」
もう、疑う気力もなくひどい疲労感を感じる。
「わかりました…。僕に何ができますか？」
「腹が減った！」
待ってましたと言わんばかりに魔王の表情が急に明るくなる。
そして目をつぶってなにかの匂いを嗅ぎ、人差し指でどこかを指差した。
「先程からあちらの方で芳ばしい香りがしてやまないのだが」

そちらへ目をやると村で人気のパン屋さんがあった。「パンですか…」
「魔王様！！庶民の食べ物などいけません！メガネ、ドラゴンの丸焼きを用意しなさい！」
また、マリーが激しい剣幕で奏人に言い寄る。
「ドラゴン！？」
「いいのだ。ここでは我々が庶民だ！！オレは解放されたのだ！頼むメガネ、パンとやらを恵んでくれないか？」
「はい、どうぞ」
奏人がパン屋に入ろうとすると、すでに結衣が袋にはいったパンを笑顔で手渡した。
「おぉ」
パンをつかむと一度匂いを嗅いでゆっくりと口に運ぶ。
「これはっ！！」
魔王は目を見開き驚愕の表情を浮かべ、そのまま止まってしまった。
「ちょっと、あなた！！魔王様に一体なにを！！」
マリーが今度は結衣に詰め寄る。
「皆さんお腹空いてないかなと、そこでメロンパンを…」
「魔王様！！お気を確かに！！」
「くっ…」
やっと動いたかと思えば今度はその瞳から涙を流した。
「まおーさまぁー！！」
マリーが魔王に飛びかかろうとしたとき魔王はその頭を押さえつけ叫んだ。
「なんと言うことだ！！」
静かに涙を流しながら手にしたメロンパンをじっくり眺める。
「どうかしたんですか？お口に合いませんか？」
心配そうに魔王を覗き込む結衣。
「女、名は？」
「あ、折笠結衣ともうします！！」

「ユイ！ありがとう！」
「きゃっ！！」
魔王はこぼれんばかりの笑顔で結衣を抱き締めた。
「なにしてんだぁ！！」
奏人とマリーが声を揃えて叫んだ。
結衣の体は突然の事に硬直している。
魔王だけがひとり感激を抑えられないようだ。
「こんな美味いものはじめて食べたぞ！！」
「あ、あぁそうなんですか…」
まだ、結衣の体を離さず、抱き締めたまま、また、メロンパンを口に運んだ。
耳元に顔が近づき結衣の顔はみるみる赤く染まっていく。
それに対して奏人とマリーの顔も違った意味で赤くなっていく。
魔王が何かに反応した。
「ん？」
そんなことお構いなしに奏人とマリーから湯気が噴き上がる。
「魔王様…私にもそのメロンパンとやらを…」
「魔王さん、ほら、違うパンもいかがですかぁ～」
お互い怒りを抑えられず勢いに任せ二人に駆け寄っていく。
「ちょっと待て…」
「待ちませんよ～」
「その手を…」
「「はなせー！！」」
奏人とマリーが一斉に黒い物体に飛びかかった。
その時、奏人は感じたことのある電気の流れを魔王の側に再び感じた。
「こ、これは！！」
青いピリピリとした稲妻のようなエネルギーが、魔王の近くに生まれる。
なにかを察知し、魔王はさらに結衣を引き寄せ後ろへ飛び退いた。

魔王に飛びかかりにいった奏人の真上に先程と同じ電撃が、直撃した。
「うぎゃーっ」
奏人を巻き込み、地面に何かが降り立つ。
砂ぼこりが舞い上がった。
そして、その中から魔王と同じく空間を移動し、ある人物が姿を表した。
「見つけたぞ！！」
奏人を踏みつけたその人物は、キラリと光る長い剣を携えている。
「くそ、まさか、ここまで追ってくるとは！！」
魔王の顔色が変わる。
舞い上がった砂煙が引く。
真っ赤な髪の血気溢れる眼差しを抱いた青年が口許を引き上げ、魔王に剣先を向ける。
「魔王！！貴様は俺が倒す！！」
下敷きになっている奏人が体を震わせ声を挙げる。
「あんた誰だぁ～！」
「俺か！？俺様は！！」
赤い髪の青年は、奏人から降り、親指で自分を指しウィンクをする。
「勇者様だ！！」
「はぁ～！？」
奏人の頭の中が再び混乱した。

第2頁　勇者様キター！！（後書き）

登場しました。
次回はとりあえず戦ってもらいますm（__）m

第3頁　バトル勃発！！（前書き）

まだまだ学園まで行き着きませんm（__）m

かわいそうな勇者様見てあげてください（^_^;

第3頁　バトル勃発！！

「勇者様来たぁ～！？」
真っ赤な髪の青年がド派手に登場し、奏人の頭の中がまたまた混乱する。
もしかしたら自分だけが間違っていたのかもしれない。
こういうのが今は普通だったのか？
だが、通行する人間の驚く顔をみれば自分がおかしなことに巻き込まれているのだと実感する。
「何なんだ！！」
戸惑う奏人を勇者と名乗る青年は横目で見るとニヤッと口許を引き上げる。
「どうした～メガネ！！隠れてた方が身のためだぜ！！」
「だから！メガネって言うな！！」
「ふん！！てか、魔王！！」
「鼻で笑うな！！」
「…てか、魔王！！貴様、逃げるなんて卑怯だぜ！！」
「無視かい！！」
「…無意味な争いは避けただけだ…お前こそこんなところまで追ってくるとは…」
「あんたね！性格も顔も、しつこすぎよ！！」
魔王の後ろでマリーがマントをつかんで隠れながら叫んだ。
当の魔王は戦う様子はなく、静かに、そして瞳の奥は勇者と名乗る男を牽制するようにたたずんでいるだけ。
そんな魔王の態度に勇者はさらに熱くなる。
「だははははっ！！驚いて声も出ないか？貴様は俺様が倒す！！どんな犠牲を払ってでもな！悪は成敗されてろ！！」
「…悪？だと…」
落ち着いていた魔王の瞳が揺らいだ。

「お前はそのトップだ！悪の根元だ！！」
まるで挑発するように勇者は魔王に言葉を投げ掛ける。
「悪の根元…ふざけるな…俺が何をしたと言うのだ！！」
魔王の眉がつり上がる。
辺りの空気が重くなった。
そんなことお構いなしに勇者はしゃべり続ける。
「お前が何をしたかしないかは関係ない。魔族の王である、お前を倒し、俺様は世界のトップに成り上がるのだ！！だーっははははっ！！」
魔王が顔を上げ勇者を睨み付けた。
「ふん、人を肩書きと見た目で判断する貴様こそ悪だ！！」
魔王の怒りを湛えた瞳がまっすぐに勇者を見据える。
だがその瞳の奥にはどこかしら悲しみのようなものを漂わせていた。
「ごちゃごちゃうるせー！！行くぜー！！」ぐしゃ…
「ん？なんだこれ？」
勇者の踏み出したその足元に何かがつぶれている。
「はっ！！」
魔王は自分の手にメロンパンがないことに気づいた。
先程避けたときに落としたようだ。
地面に落ちるメロンパンの悲しい最期を目の当たりにして、魔王は何も持たない手のひらをただ物憂げに見つめた。
「ま、魔王様…？」
マリーがそっと魔王の顔を覗き、驚いた顔を見せたかと思うと、マントを放し、急いでその場から離れた。
わなわな…
魔王の肩が震え、拳が強く握られた。
「お前、よくも…俺のメロンパンを…」
どこから出たのか、黒い湯気のような物体が魔王を包み始めた。
風もないのにマントが地面から引き離される様に、大きく揺らめく。
周りの草木も漆黒に染まる。

ドス黒い雲が遠くの方からやって来た。
「メガネ、ユイを頼む」
「あぁ、はい…」
まだ正気を保っているであろう魔王が辺りの変化に動きが止まっていた奏人を呼び結衣を解放した。
もう、メガネと言われてもいちいち訂正しているような雰囲気ではない。
奏人は魔王のそばへ駆け寄り結衣の手を掴み魔王から離れた。
マリーの逃げた木の影に同じように身を隠す。
先程までの穏やかな面持ちとは一変し魔王のイメージそのままの、世界を破壊しようとする鋭い視線。
近付くことすら、話しかけることすら躊躇する、そんな空気を身にまとっている。
魔王の真っ赤な瞳からは強烈な怒りが滲みでている。
「本物だぁ」
奏人のとなりで結衣が目を輝かせ呟いた。
「これは夢！？」
「どう？」
「いだだだっ！！」
結衣が奏人の頬をめいっぱい掴んだ。
奏人の顔面に激痛。
なんだか嬉しいやら痛いやらで頬をさすりながら、現実に存在するこの世界ではない二つの異様なものたちへ目を向ける。

対する勇者のもつ剣が金色に輝く。
まさに希望の光。
黒と黄金。
二つの色は混ざり合うことなくお互いを打ち消そうと牽制し、押し合う。
「いくぜっ！」

勇者が剣を構え跳び上がり、魔王に剣を振り下ろした。
が魔王は手をかざし見えない力のようなもので、簡単に跳ね返す。
「どうやらお互い体力回復してるようだな！！」
勇者が魔王に攻撃しながら、嬉しそうな悔しそうな、複雑な表情で呟いた。

確かにこの世界のものの動きではない。
勇者は目に見えない素早さで身軽に動き回り何度も剣を振る。
だが、その度に魔王の腕から生まれた風が辺りに吹き乱れる。
木々に傷が付き新緑の葉が辺りに舞い散る。
「あ～あ魔王様怒らせちゃった…」
マリーが飽きれ顔で呟く。
奏人と結衣はもう何もしゃべる事が出来ず口を開けて傍観しているだけとなっていた。
「偽物の正義には負けん！レベル８３は雑魚相手にレベル上げをしていろ！！」
魔王の腕が大きく振られた。
同時に先ほどとは違う緑色の疾風が空気を切り裂き勇者に激突する。
「うがぁぁ～っ」
直撃を受けたその体は数十メートル先まで吹き飛んでいく。
爆風は離れた木の影にいた奏人たちの体を激しく撫でながら吹き去る。
急に静かになった。
「勝負あったな。帰れ」
魔王が勇者を見下ろす。
「ふざ…けるな…」
傷ついた体を剣で支えながら勇者はよろよろと立ち上がる。
「帰って、俺を倒したと触れ回るがいい。傷つけ合うのが正義ではない」
また、魔王は悲しい顔をした。

勇者は片腕を押さえながら小さく笑う。
「は？笑わせるな！」
また、剣を魔王に向けた。
「悪の大魔王の首、とるまでは帰らねーよ！！」
「…と、いうか帰れませんよ」
「え？」
突然、奏人たちが今まで聞いたことのない静かで落ち着いた女の声が聴こえた。
辺りを見回すと、勇者の近くにもうひとつ人影があった。
それは実はずっとそこにあった様だ。
「どう言うことだ？」
今にも見えなくなりそうな影の薄い存在は、薄紫色の長い髪をなびかせ顔をあげた。
「あ、またメガネ…」
奏人のとなりで結衣が呟く。
「…なんだその女は、ずっといたのか？すごい存在感だ…」
魔王も目を点にして女を見ていた。
「あれは、勇者のパーティーの魔法使い…あの女の力で来たようね…しかしあの存在感…」
マリーは少しだけ勝ち誇った顔になる。
二人の言う、存在感について、勇者のことかその女のことかは置いておいて、清楚な雰囲気を醸し出しながら女はその口を開く。
「時空移動の魔導はしばらく使えません」
同じ台詞をさっきも聞いたな、と奏人は思いながら、おかしな事になっていきそうな、事の成り行きを見守った。
「ふーざーけーるーなーっ！！」
勇者はその女の肩をつかみ激しく揺する。
女は表情ひとつ変えず、長い髪と頭をただ振り回されていた。
やがて諦めたのか勇者は剣を構え魔王に向き直る。
「そ、そーゆうことだ！！やはりお前の首を頂くしかないな！！」

「同じ穴のなんとやらだな…」
魔王は戦う気力をなくし、ゆっくりと数歩前に出る。
そして、地面に落ちつぶされたメロンパンを拾い、見つめた。
「勇者よ。ここは悪いところではないぞ」
そう、魔王が呟いたとき、奏人たちには聞き覚えのあるサイレンの音が聞こえてきた。
「！」
数台のパトカーから何人もの警官が降りてくる。
それらは一目散に勇者の脇に行き体を押さえつけるとその手に手錠をかけた。
「はい、銃刀法違反で現行犯ね」
「て、いうか、何かの撮影？許可得てるの？」
「なんだ貴様ら！」
「はい、はい、説明は署で聞くからね」
「離せー！！俺様に気安く触るな！！」
両脇を抱えられ勇者は引きずられていく。
「君たちは？仲間？」
警官がいかにも怪しい魔王と隠れていた奏人たちを見ながら訊ねる。
魔王が静かに口を開いた。
「…いえ、知らない人です。危なかった…助けてくれて感謝します」
そして警官に向かって微笑む。
（勇者様売った～っ！！）
奏人は魔王への突っ込みを我慢し、飲み込んだ。

そして、そのまま勇者はパトカーに乗せられ去っていく。
それに付き従っていた魔法使いの女もなんの抵抗もなく、パトカーに乗り込んでいた。
「…」
「…」
「ふう、行ったか…で、あの者たちはなんなのだ？」

「…て、あんたやっぱり魔王なっ！！実は腹黒いのな！！一瞬でもいい奴なんじゃないかと思った僕がバカでしたぁ～」
よくわからないが、確かに魔王は名前のイメージからは想像できないくらい、いいやつと言う印象があった。
だが、あの戦闘中の雰囲気や仮にも同じ世界からやって来たライバルを簡単に蹴落とす態度は、やはり名前負けしていない気がした。
たまっていたツッコミを一通りしたが、言い過ぎたのか魔王の眉が下がっている。
しかし、思わぬ反応が帰ってきた。
突然、魔王は奏人の手を掴み微笑んだのだ。
「そうか！！ありがとうメガネ！！いいやつ！いい響きではないか！！」
「…え？」
「気に入ったぞ！！」
無邪気な顔をして奏人の両手を上下に振る。
「あの、誉めてはないんですけど…」
この目の前の男は一体なんなんだろう。
魔王と言う響きとは裏腹に、表面には悪を感じないし、本当はどんなやつなんだろう？
「肩書きや見た目で判断するな…か…」
ふと、奏人の心の中に魔王の台詞がよみがえった。

「あの…」
結衣が魔王に声をかける。
「魔王さん、行くところ無いんですよね？」
「え…結衣さん？どんな展開？」
奏人の呟きはまたまた無視される。
「行くところ…そうだな、宿を探さないとな…といっても、金がない…」
「では、私のところに来て…」

「だーっ！！ちょっとまった！！」
奏人が結衣の台詞に慌てて滑り込み、遮った。
三人の視線が奏人にむけられた。

第3頁　バトル勃発！！（後書き）

いつになったら学園にたどり着くんだぁ（´Д`）

展開、急ぎます！！

次回もよろしくお願いしますm（__）m

第４頁　郷に入りては…（前書き）

魔王登場編ラストです。

奏人のジョブは『つっこみ』と判明。腕を磨きます。

宜しくお願いします！！

第４頁　郷に入りては…

「こんないい男が下宿人なら大歓迎よ！！」
「そうだな、マリちゃんだっけ？可愛すぎる！！」
予想通り…
やはり常識からかけ離れている両親に対して、奏人は玄関先で苦笑いを浮かべる。
「奏人の父上、母上。我々で役に立てることがあれば何なりとお申し付けください」
「掃除、洗濯、家事等々～お任せください！」
調子のいい二人の、調子のいい笑顔に奏人の両親は安心しきっている。
「部屋はあり余ってるんだ！ここを自宅と思い好きに使ってくれ！！」
父、春人が笑いながら両手を広げた。

石橋家は父親は設計士として自宅で事務所を構え、雑誌編集長である、母、奏（かなで）の実家が所有していた土地に豪邸を建てて、いわゆる裕福な暮らしをしているわけで、勢いで建てた石橋邸には家政婦が一人いるだけなので、もて余している部屋はたくさんあるのだ。
そこで奏人の説明による、『両親と生き別れて行くところもない二人の兄妹』は身を置くこととなったのだ。
「結衣ちゃんと若い男が一緒のところに住むなんて考えられない」
奏人が二人を引き取った密かな理由である。
害はない。
魔王とマリーを見てそう感じてはいたが…
「では失礼します！」
「だ～ちょっと！クツは脱いで！…全く海外生活長いからって、あははは」

「こらぁ、それはテレビ！中に人はいないから！！たたくな～」
「それは、犬！！戦闘体制に入るなー」
部屋に入るまでに奏人はツッコミ過ぎて息が切れた。
しばらくは自分が二人を世話しなきゃいけないのかと思うと先行きは不安だ。
「ほう、これがメガネの部屋か…さっぱりしているな。嫌いじゃない。賢人の部屋のようだな」
そんなこともお構いなしに魔王は奏人の部屋を物色し始める。
「はあ、魔王さんは…僕の向かいの部屋、マリーさんは魔王さんの隣の部屋を使ってください。この世界で必要な物資は何とかしますから、おとなしくしててください！」
二人を各部屋に押し込めると奏人は大きくため息をついた。
下の階でまた、両親と飼い犬のジョンが騒がしくしている。
「奏人～お客さんよ！！」
母親が声を張り上げて奏人を呼んだ。
「こんな時間に！？まさか、勇者が？ここまで追ってくるのか？」
慌てて下へ降りると、そこには着替えて大荷物を抱えた結衣の姿があった。
「結衣ちゃん…」
母と結衣はお互い、久しぶりの再会を喜び笑顔で立ち話をしていた。
結衣が奏人に気付く。
「あっかなとくん。まおうさ…」
「だぁっ～ちょっと！！」
魔王の名前はマズイ！と、すぐさま結衣の手をつかんで奏人は自分の部屋に結衣を引き上げていく。
母はその場に置き去りにされた。
「あの人たちのことは、魔王とか言わない方がいい…」
「あ、ごめんなさい」
二人きりの部屋にしばらく無言の時間が流れた。
「あの、手を…」

結衣が顔を赤くして呟く。
「あああ～ごめん！」
掴んでいた手を放した。
結衣の手の温かさが奏人の手に残る。
だが気まずい沈黙がまた訪れた。
突然、思い出したかのように結衣がカバンに目をやり、慌ててそれを奏人の前に出した。
「あの…これ、マリーさんに、私のお古で悪いんだけど洋服持ってきたよ。あと、お父さんの使わないシャツとか魔王さんに」
「あ、そうだね、ありがとう！あんな服じゃ怪しまれるよな…十分怪しいけど…」
結衣の持ってきた荷物を受け取り、それを渡そうと、部屋のドアノブに手をかけた時、結衣が奏人に呟く。
「奏人くんに会えてよかった。また、お父さんの転勤で引っ越して戻ってきたんだよ。お隣に」
「！」
魔王たちの強烈な出会いですっかり忘れていたが、そんなことよりも大切な『再会』に奏人は嬉しさと驚きと情けなさの混じった変な顔になった。
「借家のままだったから、良かった」
「ごめん、大事なこと、聞きそびれて…」
「いいの。また、これからお隣さんだね」
そういって結衣が微笑んだ。
奏人はもう嬉しさを抑えるだけで、何をいっていいのかわからない。
とにかく二人きりのこの状況に耐えられなくなり、ドアを開いた。
「あ」
「あ」
「あ」
そこには魔王とマリーがドアに耳を近づけ中の様子をうかがう姿があった。

「なにしてんだぁっ！！」
「あんたこそコソコソとイヤらしい！！」
「ユイが来ていたのか。聞く気はなかったんだが、メガネの友達ならば挨拶せねばと…何も聞いてはいない」
「思いっきり聞き耳たててるじゃないかー！！なんだそのポーズ！」
「ほぉ…このポーズは聞き耳と言うのかテレビ、犬、聞き耳…覚えたぞ」
「ごまかすなぁ～！」
「奏人、再会できて良かったな。かわいいお隣さんに」
魔王が優しくて、少し意地悪な笑顔を奏人に向ける。
奏人は真っ赤になりながら、拳を握った。
「しっかり聞いてんじゃないかよ…」
今度は照れ隠しで突っ込みを入れる。
なんだか、結衣の方を見ることが出来ない。
どんな顔すればいいんだろう。
「俺は、奏人や結衣と出会えて本当に良かった。素直にそう思う。思ったことは素直に言えばいい」
「…魔王…」
「結衣はお前にまた会えて良かったと言っているぞ」
なぜだか魔王の笑みが、奏人を落ち着かせた。
「偉そうに…そんなことわかってるよ…」
「そうか」
「メガネってシャイなのね～」
マリーが茶化す。
「うるさーい！！も～！！これ！結衣ちゃんからだ！着替えてこい！！」
カバンから適当に服をつかむと二人に投げつける。
それを受け取った二人は首をかしげながらお互いの部屋に帰っていった。
「結衣…ちゃん…」

「なあに？」
「えっと、また、隣同士になれてオレも良かった…なにか困ったことがあったら言って」
「うん。お互いにね」
二人は微笑み合うと、別々の時間を過ごしていた期間の話をし始める。
変わらない同級生のこと、結衣の変わった趣味のこと…いつまでも話は続くと思われた。

コンコン
「おい、これでいいのか？この世界の服はなかなか身軽でいいな」
ドアの向こうで、魔王がぶつぶつ呟いている。
「ちゃんと着れたのかしら…反対の服装してないよね？」
「え…」
先ほどは適当に渡してしまい確認していなかったが、反対の服装…つまり、魔王が女物を着てしまう可能性は絶大だった。
「まさかね…」
魔王のスカート姿を想像しながらドアを開ける。

「うぁ…」
そこには男物の白いワイシャツをシャキッと着こなす魔王が立っていた。
先程の黒い服とは真逆で爽やかな印象。
同じ男の奏人さえも緊張してしまう。
「なんだ…なんか間違ってるか？」
「うっ…」
こんなに普通のシャツを着こなす人に出会ったことがない。
奏人の制服さえも幼稚に見えてしまう。なんだか恥ずかしさでいっぱいになった。
「似合ってます！！素敵」

結衣がすかさず誉める。
「そうか」
嬉しそうな魔王。
「なんか、普通の格好していると若く見えますね」
確かにこうやって見ると、制服を着ていてもおかしくは見えない。
「まだ、元服したてだからな…」
「元服って、まさか１６か１７歳！？」
「…」
奏人の言葉に魔王は黙ってしまう。
「…何百歳とか！？」
「よく知っていたな」
そして感心したように口を開いた。
「そんなお年！？一体何百歳ですか？」
「ああ、１７になった…」
「でぇぇぇ～！！」
開いた口が塞がらない奏人と結衣。
つまり、奏人たちと同じ年。
全く信じることはできなかった。
結衣がチラチラと奏人と魔王を見比べているのを気まずく思う。
「じゃあ、私たちと…」
それ以上言わないでくれと奏人は心の中で叫んだ。
「どーですかぁ～魔王様ぁ～」
タイミングよく、着替えを済ませたマリーが魔王に飛び付いてきた。
「なんだっ！」
マリーの私服姿もまた似合っていた。
奏人の鼻の下が伸びてしまう。
「なんか、ピチピチですぅ～」
「…」
大きな胸が上着を引きちぎりそうになってはいたが、ちゃんと着こなしていた。

「似合うわマリーちゃん！！」
結衣が嬉しそうにマリーに声をかけたが、その途端マリーの目付きが変わる。
「むっ…気安く呼ばないでくれる！？」
「えっ…」
「魔王様に抱きついたこと根に持ってるんだからねー」
「だだっ抱きついたって…わたしそんなつもりじゃ」
結衣の顔が一瞬にして真っ赤になりその顔を手で隠す。
こんないい男に抱き締められときめかないわけない。
奏人はがっくり肩を落とす。
マリーは結衣からフンッと顔を背けると、押し倒した魔王を見つめた。
「魔王様…」
じっくりとその姿を見回すとマリーの鼻から血が出てきた。
「白〜っ！素敵すぎですぅ〜！！」
「なっ！！貴様！！鼻血を付けるな！！」
魔王に抱きつき胸元に顔を埋めて押し付ける。
「なんか…」
「すごい光景…」
現実には目の前で見ることができない、だが現実に起こっているおかしな光景に奏人と結衣はその場に佇むしかなかった。
折角の真っ白のシャツが所々血まみれになってしまった。
「落ちるだろうか…」
「シャツの心配かよ…」
ホントにこの男は悪の大魔王なのかと改めて疑問に思う奏人であった。

第４頁　郷に入りては…（後書き）

ありがとうございました！

次話より学園編にやっと入ります！！

奏人のつっこみレベルはさらに上がる！？

更新頑張ります！！

第5頁　転校生来る？（前書き）

やっと高校編です。

電波な魔王様とマリーはどうなっちゃうんでしょうか？

奏人のツッコミはさらに磨かれる！？

第5頁　転校生来る？

魔王たちと出会い数日がたっていた。

何にたいしても騒動を巻き起こす二人に、奏人は疲れ果てている。

結衣と高校に行ってるときだけ平和を感じ、いや、幸せを感じることができたのだが、それもすぐに打ち砕かれることとなった。

「と、言うわけで帰国子女の阿久野真央（あくのまお）だ。よろしく」

「でぇぇ～っ！」

黒板の前に立つ見たことのある男が奏人を見つけ手を挙げた。

「そういうことだ」

「どういうことだぁ！！」

私立光陵学園は中高一貫の進学校であるが、学園長の方針は『青春は今』。

学生の個性を尊重する校風で山の中という悪い立地条件ではあるが、生徒はきちんと集まってきている。

そして制服がよく似合い、長身で美しい面立ちの転校生はあっという間に学園の噂になった。

「なんか、すげいのを飼ってるんだな…」

昼休みになり、奏人の同級生の神楽坂道信がにやにやしながら話しかけてくる。

「俺は、妹の万里ちゃんがいいなぁ～あのよく育った胸～っおい！

！今日遊びに行ってもいい！？」
「勘弁してくれよ…」
頭を抱えながら奏人は呟く。
石橋家の下宿人という話もすでに広まり奏人まで巻き込み美男美女な二人は学園に大旋風を巻き起こしていた。
たった半日で…
だが、実は魔王やら魔法使いやらが、次元を越えこの世界に来ているなんて、
「口が避けても言えない…」
「なにがだ？」
「魔王なんて、この世界の人間が信じるか？俺がバカにされるぞ…」
「そうだな…」
「あっ！！まおっ…」
あの、少し悲しげな表情がいつの間にか隣に居た。
「黙っていてすまなかった…メガネの父上に高校へ行けと言われてな…お前には余計な心配をかけないよう父上と手続きを済ませたのだ」
「父さんが…」
まあ、あのお人好しの父ならやりそうなことだなと納得はできた。
ひどいことを言ってしまっただろうか、魔王は奏人の隣の席で悲しい顔をし、下を向いている。
「あの…さっきのはそういうことではなくて…」
「いいのだ、気にしてはいない」
そしてさらに下を向き、机の中からゴソゴソと、なにかを出しながら呟く。

「お前が俺たちを信じようが信じまいが、俺は魔王である。その事実は変わらない…現に魔王である俺にはやはり…こんなに敵がいる」
机の中に入っていたたくさんの封筒に、葉書に、メモのようなものをどっさりと引き出し、広げた。
「なんだそりゃぁ～」
「なんだ、って…果たし状だろう？」
「違うだろ！どう見たってラブレターだろ！」

「いや、この封の紋様…呪いが込められている…」
「それ、ハートのシール！」

「ではこの、見たことのない呪文の羅列はなんだ…呪いが込められている！！」
「それ、メアドだろ！！」

「校舎裏で待つ…決闘の申し込みでは！？」
「それは告白の待ち合わせじゃ、てかどれだけ恨まれてきたんだよ…」

「う～ん、ということはすべて女性からと言うことか？」
悲しみの表情から困惑の表情に変わる。

「すげ、たった半日で噂になり、すでに女子からあんなに手紙をもらい、告白の待ち合わせまで受けとるとは！！侮りがたし！帰国子女！！」
道信が腕を組んで、関心というよりは羨望の眼差しで真央をみる。

「そうだな…」
魔王改め真央はへの字に結んでいた口を緩め、一枚の紙を指差した。

「これからいこう。メアドという呪文は未知だからな、やはり会いに来てくれと言うのが分かりやすい」
「り、律儀なやつだな…」
「というか、用事があるならそちらから来てもらいたいのだが…仕方ない」
若干不満そうに眉を寄せるもなんだか、楽しそうに瞳を輝かせた気がした。
彼は彼なりにこの世界に馴染もうと頑張っているのかもしれない。
面倒を見ると決めた以上真央と、万里を見守ってあげないといけないな、と、奏人は思った。

「ところで、メガネ…」
「奏人です…」
「あぁそうだったな。ユイはどこにいるのだ？相談したいことがあるのだが」
「え…」
そういえば真央は結衣には優しかったりする。
そして、あの日、真央に抱き締められた結衣の表情が忘れられない。
真央も結衣の優しさに触れ気に入っていると言うのか…
一緒にすんでいる奏人ではなく結衣に相談したいこととはなんだ？

「結衣ちゃんは…隣のクラスだよ」
抵抗したってあんな何でも持ってるやつに敵うわけがない。
「そうか」
にっこり微笑むと真央は奏人を置き去りにして行ってしまった。
「結衣って折笠結衣？あの二人できてんのか！？」
「どうだか、関係ないさ」
感情に反して行動してしまう自分。

そんな自分にイライラする気持ちを抑え、奏人はカバンから弁当を出す。

「メーガーネー」

頭が急にズッシリと重くなり、柔らかいものが乗っかってきた。

そして、低い声が耳元に重たくのし掛かってくる。

「！？」

驚いて顔をあげるとそれは大きな胸だった。

「うわぁぁ！！」

奏人は乗っかっていたものから慌てて離れた。

そこには金髪ではなく茶髪に髪を染め直し、学園の制服を来ているマリー改め万里が眉間にシワを寄せ、怒りを抑えきれない表情を湛えて立っていた。

「あーのーおんなーなんとかしろー」

まるで呪いの呪文を唱えるように恨みを込め万里は声を出した。

大体察しはつく。

真央と結衣の事だろう。

「そっとしとこうよ…君はいわゆる召し使いだろ？」

「召し使いとは失礼しちゃうわね！」

「魔王はモテて大変だろう、昔から」

「は？なぜ！？」

「だってあんな容姿に性格だって悪くないし、好きにならないやつなんていないだろ？」

「悪の大魔王が好かれてどうするのよ！！好意的な視線を向けるやつらはみんな敵よ！！侮辱だわ！！」

「万里さん、それは嫉妬と言います。いくらお兄様がイケメンだからといってブラコンも大概にしないと～どうですか、僕と一緒に帰

りませんか？まずはお友だちから…」

「誰？」

「神楽坂道信と言います。奏人君の旧友、お兄様のクラスメイトです」

「ふ～ん」

組んだ腕の上に胸を乗せ背筋を伸ばして偉そうに立ちながら、道信を見る。

「腹黒さは合格ね。だけど、優しそう…だめです」

「そんな～でも、お兄様はもっと律儀にこんなとこにもいく予定ですよ！！」

「ちょっ！！道信！それは！」

道信は机に置きっぱなしになっていた、校舎裏で待つ。そう書かれた手紙を万里の前に突き出した。

「なにこれ！！」

「お兄様は、たくさんの方に手を出し…」

「決闘の申し込み～！？」

万里は突然目を丸くして髪を逆立てた。

「素晴らしいわ。何処へいっても悪を撒き散らす。流石魔王様！」

「え、やっぱりそうなるの？」

「さて、魔王様、どうやって退治なさるのかしら～放課後が楽しみね！！ふふふ」

そう言って、万里は笑いながら帰っていった。

「万里さん、ちょっとイタイ子なのかな？さっきお兄様のこと真央さまとか言ってたよね…」

「ははっ…ずっと二人だったからかな？」

奏人は適当な言い訳でしのいだ。

それが精一杯だ。

「まあ、いいや、飯、食おうぜ！！」
そこへ真央が帰ってくる。同時に先程のモヤモヤした気持ちも復活した。

「おっ！！真央くん！一緒にどう？」
道信が少し嬉しそうに真央を呼ぶ。
人懐こくてあんまり深いところには突っ込んでこない道信は、奏人には居心地のいい友達だった。
小学校からさっぱりした性格でメガネでからかわれていた奏人にも至って普通に接してくれていた。
そのため友達も多い。
道信にしても数居る友達のなかでも奏人が付き合いやすいのだ。
「昼食か。どれ、俺も…」
真央がカバンから弁当箱をだした。

「どういうことだぁ！！」
「いや、母上が…」
「何で重箱だ！！」

「いや、母上が…」
「母上～同じもん作れよ！！てか、よくそんな重いもの持ってたな…」

「いや、母上が…」
「そこは関係ないだろ」

「落ち着けメガネ。母上の作る食事は絶品だ。弁当なるものを作っていただけると聞き、楽しみにしています、と言っただけだ。母上の心意気感謝し、持ってきたまでのこと」

非常識な親を持つと苦労するが、さらに追い討ちをかけ常識が通用しない同居人をもっても苦労する。

つくづく自分の置かれた環境を後悔した。

「うまそー！！貰ってもいいか？」
道信が重箱の中身に手を伸ばした。
「そうだな…残してしまっては示しがつかないからな…皆で分けるとするか…」
その台詞を、どこから聞き付けたのか女子が私も！！私も！！とお弁当の中身をもらいに来る。
その度に名前を名乗り、握手やらを求めていく。
クラスの男子もその波に乗り真央に話しかけに来た。
だが、その度に真央は丁寧に対応する。
いつの間にか、真央の周りには人だかりができていた。
「もう溶け込んでるな。いいきっかけじゃないか！」「そ、そうなのか？」

ときとして、非常識な行為も向けられた人によっては最善の指針となるのだろうか。
みんなの中に囲まれ、どことなく嬉しそうな真央を見ながらそう思った。

第5頁　転校生来る？（後書き）

次回はアイツが登場！？

奏人、がんばれ…

第６頁　転校生来る？（前書き）

忘れてた訳じゃないですよ～
アイツはちゃんといますよ～（」´０、）」

登校一日目。完結。

第6頁　転校生来る？

なんとか無事に授業を終えて、放課後になる。

帰り支度をして、結衣を迎えに行こうと立ち上がると、隣の席でじっと座っていた真央が口を開いた。

「そうあせるな…」

「は？」

「敵さんを待たせるくらいがちょうどいい」

「はぁ？」

「…作戦でも練っておくか」

真央は腕を組ながら真面目な表情で奏人を見た。

「ちょっと待てって！さっきからなに言ってんの？」

「なにってこれだ！」

やれやれと言うように困った顔を向けながら、紙切れをつまんで奏人の顔の前に出す。

「放課後、校舎裏で待ってます。皆野由紗…？皆野？聞いたことないな…一年かな！？」

「下克上ね」

「マリー！？」

突然万里が現れ、反射的にマリーと呼んでしまい慌てて口を塞いだ。

真央や、万里の名前は、三人と結衣で、この世界では名前が必要だ

ろうと、編み出したのだが、この二人は全く使う気配もない。
奏人もまだ口に馴染んではいないのだが。

「応援に来ましたわ！」
万里が期待に瞳を輝かせながら真央の前に立つ。
「必要ないだろ…」
「バカね！！援護をするのがあたしの仕事！！」

完全に万里は勘違いしている。
踏み込んでいい領域なのか？奏人は首をかしげた。

「お前は俺が一年に負けると思っているのか…」
真央が静かに口を開いた。
「そ、そんなこと！」
「ではなんの応援だ！お前になど応援されても勝敗は決まらない。
わかったら早くこれを持って帰れ！」

そして、空の重箱が入った包みを万里に渡した。

「うぅ…」
「さあ、ゆけ」
「はい～っ」

真央はうまい具合に万里の攻撃を交わす。
しかし、魔王とはいい身分だ。

「おい、真央！そんな言い方はないんじゃないか？」「いや、女はいない方がいい。あいつが傷つく方が辛いだろ」

「えっ」

「間違っているか？」
「いや…」
真央は決闘だ勝敗だと言いながら、実はこれから何が待ち受けているのかわかっているんじゃないだろうか…そんな疑惑が頭を駆けた。
「さて、行くか…」
「あぁ…はい」
二人は鞄を持ち教室を出る。
途中、結衣のクラスを覗いたが、すでにその姿はなかった。
奏人は諦めて興味本意もあったが、真央について行くことにした。

「じゃあ、僕はこの辺から…」
「？」
昇降口を抜け、校舎の裏へ抜ける通路の途中で奏人は見つからないような茂みに隠れた。
相手だって二人で来たら警戒してしまう。
気を利かせたつもりだった。

「そうだな…メガネは隠れていた方がいい。そのメガネに攻撃を受けたら大変だ！」
「だからーメガネじゃねーし！攻撃受けたくらいじゃ本体は大丈夫だから！！」
「そうなのか？いや、そうでもないようだぞ…なんだか、異様な気配を感じる…」
「え？」
人通りの全くない校舎裏の大きな木の影に、人が立っているのが見えた。

目を凝らし影になっているそのシルエットを見る。
手に何か持っているようだ。

「待たせたな…」
真央は迷うことなく真っ直ぐ歩き出し、その影に近づき声を掛けた。

こちらを向く。

「てめぇ…」

そこに居たのは、魔王を追いかけ次元を越えてやってきた、勇者だった。

奏人は魔王がやって来た一騒動の中に確かに勇者の姿があったことを思い出した。

だが、剣は木刀に変わり、学園の制服を着ている。
どう言うことだか、混乱する。

勇者は怒りの表情で手に持った木刀を真央に向かって振りかざした。
真央は間一髪で、後ろに飛び退きそのまま刃は地面に突き刺さる。

「…」
「ここで決着をつけてやる！！」

「いや、ちょっと待て」
「あぁ！？」
真央が手を前にだし、勇者を引き留める。

「人違いだ」
「はぁ！？」
「俺はここで皆野由紗なる人物と待ち合わせをしている。ていうか、お前は誰だ？」

「…」
奏人も勇者も言葉を失う。

「う～ん、どこかで会った気がするんだが…」
「お、俺様の顔を忘れるとはいい度胸じゃねーか…」

何となく勇者が魔王を退治したくなる理由がわかったが、今はそれよりなぜ勇者がここにいるのかわからなかった。
しかも待ち合わせの人物も見つからない。
と、いうことは…奏人の頭の中で話が繋がってきた。

「ふん、お前！メガネがどうなってもいいのか？」

突然、勇者が奏人の方を見る。

気づかれていた。

その辺りは流石に人よりは飛び抜けているようだ。

「？」
そして奏人はいつの間にか後ろにいた人物に、肩を軽く叩かれる。
振り向くと勇者と一緒にこの世界に来た女がにっこり微笑んで立っていた。

「人質です」
訳もわからず腕を捕まれ茂みから連れ出された奏人を見て、真央は口許を引き上げた。
「…卑怯な奴だな…」
「貴様に勝ちさえすりゃいいんだよ！！」
「ふん。どっちのメガネが、どうなってもいいって？」
確かに、両者ともメガネではあるが、余裕の表情を向ける真央に勝機がある様に思える。
「あいつはメガネは壊れても本体は平気だそうな…」
「なっ！！」
「！！」
勇者と女は目を見開いて奏人を見つめた。
「そこ、驚くところ！？てか、あなたも驚いちゃうの！？」
「コホン、『あなた』ではありません。私はここでは丸々と言います。あなたのメガネ、すごいですわね…」
丸々は近くでまじまじと奏人を見つめる。
その顔はよく見ると整っていて、メガネの奥の瞳は大きく魅力的だった。
「え、それ普通のメガネじゃないの？」
「いいえ、これが破壊されると…」
「破壊されると！？」

ボンッ

突然丸々のメガネが爆発した。
軽い爆発であったが、奏人と丸々の距離が開く。

真央が何かしら攻撃したようだ。
指をこちらへ向けて立っている。
それはメガネだけを狙ったものだった。

「あああああっ！」
丸々が声をあげ顔を押さえるが、傷はできていない。

「丸々は心に１００のダメージを受けた」
「心にかい！！」

「メ、メガネは…高い…」丸々は地面に倒れる。

「なんでだぁ～」

「貴様、よくも俺様の仲間のメガネを！！許さね～」

勇者の周りに真っ赤な気が揺らめいた。

「お前、もしかして…」

真央が、やっと勇者のことを思い出したように手を叩いた。

「俺のここでの名前は皆野由紗！みなの勇者様だ！！」

「やっぱり決闘の申し込みだったんかい！！」

「き、期待などしておらんが、騙された気分だ…」

「期待してたんだ…」

「何の期待だ！！」

「魔王は心に５０のダメージを受けた…」

「丸々さん、しつこい…」

「そうか、お前、あのときの警察とやらに逮捕されていった…」

「その記憶？」

「そうだ。あのあと、俺様は警察官である皆野泰三に引き取られ、学校っつーとこで、で更正っつー事をしろと連れてこられた！そしたら、何やら人気のあるやつが来たと噂になるが、何で貴様だ～！！お前、魔王だろうが！！」

「人気？わからん…わからんが変なしがらみにとりつかれたお前なんかよりは、魔王であってもこの世界を知ろうとする俺の方が人望が厚いらしいな」

真央が、勝ち誇った顔を向ける。

「し、しがらみ…？」

「勇者様！？」

勇者が木刀を下ろした。

「この世界は悪くない。なにしろ…」

「あれ？かなとくん？」
「結衣ちゃん！？」
そこに、結衣が紙袋を片手に現れたのだ。
「真央くん、頼まれてたもの」
結衣は真央の前に袋を差し出し、受け取った真央は中身を開けた。
「こーんなにうまいものが！！」
中からメロンパンを取り出し勇者に投げる。
それは口のなかにヒットした。
「うぐっ！！」
「どうだ！！」
「甘ったる…」
チュゴーン！！
「この味が解らぬものは去るがよい！！」
「てめぇ…」
ピピピッ
「はっ！！」
突然、由紗の持つ携帯のアラームが鳴った。
「わりぃ、バイトの時間だ！！」
そう言うとものすごいスピードで丸々を抱えた勇者は消えていった。

「バイトって…ある意味一番現実味があるんじゃないか？」
奏人は結衣を見ると、結衣はキョトンとした顔で立っていた。
「結衣、ありがとう」
そう言って真央はメロンパンをかじった。
「もしかして、昼のお願い事って…」
「ああ、こいつをお願いしに行ったのだ」
「なんか、切実な顔だったから断れなくて…」
「オレに言え～！」
そう言って、奏人は結衣の手をつかんでその場を後にしたのだった。

第６頁　転校生来る？（後書き）

苦学生と化した勇者様（Ｔ＿Ｔ）がんばれ！

メガネの本体は経験値を大量に得て、次のレベルまであと少しです！！

一読いただきましてありがとうございました！

完結って、話はまだまだ続きます（ｏ＾－'）ｂ

第7頁　部活って何？（前書き）

奏人はツッコミから、フォロワーにジョブチェンジしました。

真央さまスペシャルまだまだ続きます…

第7頁　部活って何？

「おいメガネ、部活とは何だ？」

勇者との決闘？から一日が経ち、結衣をパシった真央に更なる苛立ちを感じる奏人に、何事もなかったかのように真央は話しかける。

母を説得し、お弁当も通常版になった天気のいい昼休み。
奏人と真央、結衣と万里、そして道信の五人で屋上に来ていた。

「真央くん、部活に興味あるんだ！！」
結衣が瞳を輝かせて真央を見上げる。

「魔王様！！そんな怪しい集会に興味がおありなんですね！！流石ですわ！！」
万里も勘違いしながらも尊敬の眼差しで真央を見る。

「そう言えば今日から仮入部期間だったよな！体験もできるみたいだぞ！」

話が妙な方へ向いている。

奏人はだが黙って昼食の箸を進めた。

「だけど、何で突然そんなことを？」
道信の疑問に真央はポケットからまたまたたくさんの紙を取り出した。

「今朝から挑戦状を何枚も受け取ったのだが、それが何の挑戦なのかわからなくてな」

部活動名〇〇、場所、熱いメッセージが書かれた紙が何枚も出てくる。

やはり有名になったものの性のようだ。

「じゃあ、放課後みんなで回ってみない！？」

言い出したのは結衣だった。

「！！」

奏人の箸が止まった。

「ね、かなとくん！！」

みんなの視線が奏人に向いた。

「つ、付き合うだけなら…」

俺は保護者かっ！！

奏人はそう言いたいのを我慢した。

当の奏人は部活には興味はなく家で本を読んだり、父の仕事を手伝う方がいいのだが、また真央が結衣に変なことを頼まないか監視もしなければ…。

そんないきさつで五人は放課後部活巡りに出ることになった。

「まずはこれからだな」

「吹奏楽部？」

「楽器できるの！？」

音楽室に入るなり、部員たちの驚く顔を横目に、辺りを見回した真央はピアノを見つける。
何も言わず座ると、聴いたことのない旋律が音楽室の中を優雅に飛び交う。
そのメロディは優しく、心を癒した。
見事な演奏で周りの人間を魅了する。

「さ、さすがに育ちが違うのか？」
沸き上がる拍手のなか、真央は立ち上がり、無言で去ってしまった。

「どうしたの？」
結衣が気にして、追いかける。

「あんな適当でいいのか…」
結衣に不思議な顔を向けた真央はまた、ポケットから紙を出す。

「次はこれだ」
「絵画部！！」
美術室に移動した五人は更なる奇跡を目撃する。
とりあえず出されたキャンバスに落書きしかできない奏人たちに比べ、真央の絵は全員が絶賛するほどのものだった。

闇と光のコントラストが皆の心をわしづかみにした。感激した部員たちが真央の周りに集まる。
だがまたすぐ立ち上がると、去ってしまった。

「お気に召しませんか？」
今度は万里が真央を心配して声をかける。

「適当にかいたのに…」

またボソッと呟き、紙を出す。

「演劇部…」
こちらは部屋に入り盛り上がった部員たちに王子の衣装を着せられ、喜ぶ結衣を無視して何も言わずに去ってしまった。

「パソコン部」
魔王が勇者を倒すゲームを開発し、去っていく。

「手芸部」
魔王の衣装を作成し去っていく。

どれも不思議な顔でその場をあとにする真央に奏人が、告げた。

「部活って言うのは、真央への挑戦じゃないんだよ。自分を磨くための場。特に文化系は合う合わないがあるからね…真央は運動系がいいんじゃないか？」

「成る程な…決闘の申し込みかと思い、適当にやって相手の出方をうかがったのだが、みな戦うそぶりすら見せなかった。修練の場だったのか。」
納得した真央は、奏人を見つめ微笑んだ。

「な、なんだよ…」
「…メガネ…やっとしゃべったな…」
「な、なんだよ…それ…」
何よりも嬉しそうに奏人を見た真央に、何故か奏人は赤面してしまう。

「…ほら、これは？」
奏人は恥ずかしくなって、話を変えようと真央の持っていた紙の中から一枚引き出した。

「バスケ部…」
ここで、他の部活に用があると結衣が一行から離れた。
真央と一緒でなければ大丈夫だろうと、引き留めることはなく一旦別れることにした。

バスケ部はちょうどゲームが始まったようで、その動きを真央は食い入るようにじっと見る。

「…ルールがあるようだな…」

見学していると、弾かれたボールが奏人めがけてすごい勢いで飛んできた。
突然のことで、避けられない。
「危ない！！」
部員が叫ぶ。
しかし、奏人の顔面手前でボールは止まった。
奏人は目をゆっくりと開ける。
「あれ？？」
「危うくメガネをやられるところだったな…」
真央が奏人に笑いかけながら、ボールを片手で掴んでいた。
そのボールを一度地面に弾ませる。
バウンドしたボールをそのまま持ち、ゴールに向かって放った。
ボールはゴールネットに吸い込まれる。

「あんな距離から！？」
辺りがざわつき、真央の周りに部員が集まる。
「一緒にゲームやらないか？」
「うむ。先程ので大体ルールは理解した。やってみるか…」
コートに立ち真央はシャツの袖を捲る。
ゲームが始まると、いつの間にか女子が大量に観客席に集まり、黄色い声援が体育館に響き渡った。
「どこかでやっていたのか？」
「いやあ…そんなはずは…」
奏人も道信も、一度見ただけで、一度触れただけであんなに見事なドリブルさばきに、シュート技術が身に付くものなのかと目を疑う。
「ん…？！」
と言うか疑って見ると、ジャンプするときに何か呟いているようだった。
「まさか…万里…真央は魔法使ってない！？」
奏人は小声で万里に訊ねる。
「あんなに楽しそうに魔法を使い戦う魔王様。惚れ直してしまいました…」
万里が鼻血を拭きながら真央に熱い視線を送っていた。
「だーっ！！やめやめ～！」

奏人があわてて真央の腕を掴み人影のないところへ引きずっていった。

「そんなことしちゃダメ！魔法なんて使ってばれたら…」
「どうなると言うのだ？」
反省の色が見えない真央に奏人は釘をさす。

「うちに置いてあげれなくなるぞ！！」
「ぬっ！！それは困る…わかった、魔法は禁止か」

「真央くん！これなんてどうだろう」
そこへ数ある運動系の紹介の用紙のなかから、道信が一枚もってやってきた。

「…弓道部か、弓を射るのは得意だぞ」

袴姿になり部員の説明を受けるのを制止し、的の前に立つ。
また、その姿は見るものを引き留めた。
高校生とは思えない落ち着いた佇まいに真っ直ぐに伸びた背筋。
そしてあの容姿。

「羨ましすぎてグーの音も出ませんな…」
道信も奏人も真央の姿に見とれ入ってしまった。
万里の鼻血は止まることがなかった。

きれいな構えから、何発射っても中心に当てる。
その音さえも真央への爽やかな歓声の様だった。

「やるわね」
「主将か？」
「えぇ…経験があるようね…」
女の主将が興味深そうに真央に語りかけた。
「あぁ。狩りによく出て、猛獣の類いをよく…」
「だあああ！！そろそろ行かないと！！次、次～」
目が点になっている主将を置いて、奏人はまたまた真央をその場から引きずっていった。
「なんだ、今のは魔法ではなく、俺の腕前だが？」
「余計な話はしないように！！」
「そうだったな…魔王は認められていないんだったな…」
少しだけ、悲しい目を向ける。
なんだか、この目をされると奏人は何も言えなくなる。
「まだ、たくさんあるけどもう時間だな…どうする？」
道信が時計を見ながら訊ねた。
どうしようかと、話をしながら、広い体育館内を男三人と真央にベッタリの万里は歩く。
「よし、明日も部活ツアーをしようぜ！！」
ただの暇潰しにしか考えてない道信が真央の肩を叩く。
「楽しみだな」
だが真央もまんざらではないようだった。
「あぁ～魔王様の勇姿を明日も見れると思うと…」

「万里鼻血…ん？どうしたんだ？」
真央がある部屋の前で立ち止まりじっとそのなかで行われていることを見ている。
「あ、あれは…」
「たしか、皆野とかいう派手な転校生…」
剣道場。
その部屋の看板にはそう書いてあった。
そこには昨日存在が明らかになった勇者様改め由紗の姿があった。
「あいつ、楽しそうだな…」
真央は羨ましそうに由紗を見ている。
確かに、由紗との打ち合いに勝てるものはいないようだが、一人一人と向き合い、話をし、爽やかな汗を流している。
こうしてみるとただの高校生活の一コマだった。
「これが、部活か…」
真央がはじめて何かに憧れるような目をした。
「みんな何かに打ち込んで、一生懸命に毎日を過ごしてるんだよね…僕はなにもしてないな…」
平凡が本当にいいのか？
奏人の頭の中に疑問が浮かぶ。
変えるならどうすればいいんだろう？

口を閉じてしまった二人の空気に耐えられない道信が奏人と真央の背中をひっぱたく。

「おいおい、落ち込むなよ！打ち込むものなんてこれから探せばいいだろ！！」

「道信…」

道信の前向きさはホントに奏人の救いだった。

「…だな！！人それぞれ夢中になるものは違うしな！それを探すのが今からでも遅くないよな！よし、結衣ちゃんを迎えに行くか」

「たしか、アニケンとかいう部活だったな…」

「え…」

「アニケンって…」

「アニケン…？」

「アニメ研究部」

奏人は結衣を迎えにいこうか迷ったのであった。

第7頁　部活って何？（後書き）

奏人が、結衣ちゃんをフォローするにはまだレベルが足りないようです。

次回も、真央さまスペシャル
学校以外のところに真央さまが行きます。

第8頁　魔王様の休日？（前書き）

真央さまスペシャル第三段！？

奏人はまたまたジョブチェンジをし、おかあさんに転職しました。

第8頁　魔王様の休日？

あれからいくつか部活を廻ったがこれといって真央に見合うものが見つからず。

と言うか、騒ぎ散らすだけ散らし、どれも真央が魔王の力を発揮するだけに終わった。

そして、初の休日を迎えた。

「奏人～」

清々しい日差しの射す気持ちのいい朝。

奏人は母親に起こされた。

「ん…なに！？」

「ちょっとお願いがあるんだけど、真央くんに！！」

「…直接起こせよ～」

電波を浴び続け、日々の疲れがハンパない奏人は休日くらいゆっくりさせてほしかったのだが、どうしてもと強くお願いされ、渋々真央の部屋に向かった。

母は下で朝食と土曜の出勤の準備があるため奏人に頼んだようだ。

軽くノックするが返事はない。

ノブを回し開けようとしたが、何故か気が引けたのでそっと中を覗き込んだ。

「！！」

バタン！

「見、見てしまった…そうだよな…そうだよな…」

その中の情景に奏人の心臓は飛び出そうだった。
なにかを納得しようとして懸命に自分に言い聞かせる。
だが、その手はまたドアを開けた。

バタン！

「ななななんで、万里が！」
また開きかけたドアを閉め心臓に手を当てる。
ドキドキが止まらなかった。

「いやいや、ここは俺の家だ。そんな不埒なこと許してはいけない！よし！」
奏人は何度も深呼吸をする。

ガチャッ

「キャーッ！！」
叫んだのは奏人だった。

目の前に万里が怪しむような目付きで立っていたのだ。

「なによ…」
「なによじゃない！何でここにいるんだ！！」

「は？」
「な、何で真央の部屋に万里がいるんだ！！」
「なに興奮してるの？」
奏人の慌てっぷりに万里がニヤニヤしながら奏人のおでこをつついた。
「私は魔王様に添い寝してさしあげてただけ」
「添い寝～！？」
奏人の顔面が真っ赤になる。
やはりこの二人はそういう関係だったのか。
なんだか、頭の中がふわふわしてきた。
「誰が、添い寝してたって？」
「だから、私が魔王様に…あ、魔王様！」
ベッドから起き上がり冷たい視線を万里に送る真央。
「貴様…勝手に入るなと言ったはずだが…？」
そう言うと着ていた服がはだけていることに気づき、無言で直す。
「…俺に触れるとはいい度胸だ…」
「まだなにもしてません！」
「うるさい！そんなことはその鼻血を拭いてから言え！！と、言うか『まだ』とはなんだ！！」
「申し訳ございません！」

真央の剣幕に万里は逃げるように部屋を去っていった。
「え、じゃあ別に何も無い感じ！？安心していい！？」
何故か涙目の奏人が涙を拭きながら真央に訊ねる。
「というかメガネ、お前も何をしている…」
怒りが治まらない真央のキツい視線が奏人を凍らせた。
「チッ、あの女いつかハエにしてやる…」
そう言いながら、また、布団をかぶり眠りにつこうとする。
「ちょっと待てって！！」
奏人の声もむなしく真央は眠りについたようだった。
「寝起き悪すぎだろ…おい、起きてくれぇ」
先程の恐ろしい形相とは程遠く、すやすやと眠るかわいい寝顔に、奏人は起こすのをためらった。
「こいつも疲れてるのかな…」
今まで暮らしてきた世界から全く未知の世界にやってきて、いきなり学校だ部活だとあれだけ騒いだのだ。
疲れないわけがない。
だが、真央は疲れただのと言ったことはない。
世界が変わるってそんなに楽しいことなのか？
母親にはうまいことといってもう少し寝させてあげようと、静かに部

屋を出ようとした時。
「俺は魔王になどなりたくない…」
真央が呟いた。
「え！？」
振り返るとそれは寝言で、真央はまだ眠っていた。
奏人は起こさないように部屋を出た。
「あれ？」
そこには万里が立っていた。
「まだ寝てるよ」
「お疲れなのね…」
「いつもああなのか？」
「まあね」
いつもあんなに寝起きの悪い真央を万里は起こしているのだ。
「なんか寝言を言ってたぞ。魔王になどなりたくないとか…」
「…そうね」
万里はすべてわかっていて真央に付き従っている。
実は万里が一番大人なんじゃないかと奏人は思った。
母には素直に、真央は疲れているようだからあと３０分寝させてあげたいと告げ、朝食を我慢し、両親と万里と奏人で何でもない会話をする。
万里は本当に真央のことを想っている様だ…
出てくる話の内容はほとんど真央のことだった。
「さて、行くか」
真央を起こしに奏人が立ち上がる。
万里は付いてこないようだった。

「おーい！朝食できたぞ」

そう言いながら、ドアを開け中に入った。

「あぁ、おはよう」

朝日に照らされたきれいな顔に柔らかい笑顔が返ってきた。
学園の白いシャツに、ネクタイを結ぶ姿はまるで、別の世界の王子さまとかそういった爽やかな類いを連想させる。

「て、何で制服？」
「行かないのか？」
「今日は土曜だから休みだけど…」
「土曜は休み？」
「そ、この世界は一週間といって、7日の周期で回ってて、月、火、水、木、金の五日間は平日で僕ら学生は学校。土曜、日曜は基本的に休日で学校はお休みなんだよ」
「今日が土曜で、明日が日曜…では、休日俺は一体なにをすればいいのだ…」
先ほどの機嫌の悪い真央と違い、眉を寄せ困惑の表情を見せるいつもの真央に、奏人は安心した。

「とりあえず、朝御飯を食べようぜ！！母さんがなにか用事があるみたいだから今日はその用事をこなせばいい」
「母上が？日頃の恩を返さねばな。では、学生服は着ないでいいのか…」

学校がよほどお気に入りなのだろう。
制服にまで愛着がわいているようだ。

真央は渋々着替えを始めた。

「おはようございます」

「おはよう」

「おぉ！！起きたか寝坊助」

「真央さまおはようございます」

「ああ、おはよう」

真央が静かに席につき朝食が始まった。

「ねぇ、真央くん、今日はお暇？お願いがあるの！！」

母がさりげなく話を切り出す。

「なんでしょうか。今日の俺は母上のためにあります」

そんな恥ずかしい台詞真央にしか言えないな。と奏人は味噌汁を吹き出しそうになりながら思った。

「あら、言うわね！じゃあ、付き合ってもらおうかしら。奏人、万里ちゃんもお暇なら一緒にどう？」

母が嬉しそうに笑った。

「どこに付き合わせる気？」

「ひみつ～」

朝食を済ませると、母の見立てた服を着た真央と万里、いつも通りの奏人、スーツを着こなし出勤スタイルの母の４人は家を出た。

街中を制服以外で歩く真央と万里はスタイルもよく、輝いて見えた。

歩く人が必ず振り向くのだ。

しばらく歩くと倉庫のような建物の中に入った。

「え？ここって…」
「私の携わってるファッション雑誌の撮影スタジオよ。今、専任カメラマン呼んでくるから」
撮影スタッフらしき人が何人も世話しなく動き回っているところに取り残された3人はただ呆然と立ち尽くした。
「なんだこの異様な空間は…」
「なんだか怖いですわ…魔王様、お気をつけください」
「いやいや、大丈夫だろう」
奏人は母がなぜ呼んだのか大体察しがついた。
「はい、こっち向いて！」
「？」
パシャ
突然の事に驚きながら、三人はフラッシュを浴びる。
「貴様…なんだその武器は！」
真央が構えた。
すぐに奏人がその腕を抑える。
「あれは、カメラといって写真を撮る機械だよ。体に害は全くないよ」
「…そうなのか？」
「う～ん驚きの顔もなかなか様になってるわね！！合格。さすが姉さんが連れてくるだけあるわ」

「あ、ミナミさん！？」
「久しぶり、奏人くん」
どでかい一眼レフを構えた女性は奏人の母の妹でフリーカメラマンをしている、一条ミナミだった。

「急遽モデルさんが倒れちゃって、慌てて探したんだけど、うちにいいのがいたのよ～」
母の奏がミナミの横に立ち腰に手を当てる。

「やっぱりね…」
奏人は納得の表情を浮かべた。

「おい、メガネ、なんのことだかわかるように説明してくれ」
と、全く状況がわからない真央に、奏人は何から説明すべきか困り果てる。
とりあえず、その辺にあった雑誌を開き、雑誌について、モデルについて、撮影について…等をわかる範囲で一通り説明してみた。

「つまり、今から俺がそのキャメラとやらに写真を撮られて撮られた写真が雑誌とやらに載ると…」
「そ、流石飲み込み早いな。うちの学校はその辺厳しくないし、やってみたら？」
「そうか…奏人が言うのなら…」
学校生活以外で楽しいことを見つけてくれるといい。奏人は素直にそう感じた。

第8頁　魔王様の休日？（後書き）

次回は真央さまがいよいよキャメラの前に立つ！！

そして、奏人はおかあさんからまたまたジョブチェンジ！

このネタしつこすぎますね＞（｜　｜；）＜反省

ありがとうございました！

第9頁　魔王様の休日？（前書き）

真央さまお手伝い編後半です。
モデル初体験。真央さまはきちんと奏人の母の役に立てるのでしょうか？

第9頁　魔王様の休日？

「みんな！準備はできたかしら！！」
母のよく通る声はスタジオ中に響いた。
そう言えば母の働く姿を見たのは久しぶりだなと、奏人はちょっとだけ感動する。
「うきゃー！魔王様、ステキィ～」
スタイリストに髪型をセットされ今回のコンセプトの『ちょい夏スタイル』の衣装に着替え、出てきた真央は本物のモデルのようだった。
迂闊に話しかけることが出来ない。
万里には関係ないようだが。
そして、そんな本物を醸し出す真央に、その場の空気がピリッとした。
少し遅れて、一緒に撮影することになった、本物のモデルの『サチ』が出てくる。
「か、かわいい…」
万里ではないが、奏人も目の前の美女に釘付けになる。
「宜しくネ、えっと…阿久野くん？」
サチスマイルが真央に炸裂する。
「…」

真央はサチの顔をチラッと見下ろすとすぐ目線をそらし、小さく呟いた。

「女でもキャメラに撮られるというのか…」

「…」

まだ何か勘違いしているようだ。

「…あ、じゃあ、真央くん！そこに立って！！」

「…」

ミナミがカメラを構えながら、指示をする。

しかし、真央は微動だにしない。

見かねた奏人が、真央の背中を押す。

「真央、言う通りに…」

「ああ…ここか…」

やっと指示が通りセットの前に立ち、カメラと向き合った。

「はい、じゃあ撮影始めます！！」

初夏がテーマのため薄着で真央に近づくサチ。

羨ましいことこの上ない。

ふと、奏人は万里に目をやる。

「！！」

その形相はまさに悪魔。目は血走り、歯からはギリギリと音がなり、

握られた拳からは血が滲んできそうだった。
いまにも飛びかかりそうな勢いである。

そして、向けられたカメラのレンズをただ睨み付ける真央。
何が飛び出してきても応戦できる構えを取る。

「真央くん！笑って！」
ミナミがシャッターを切りながら、ハキハキと声をかけるが、やはり、微動だにしない。

「真央！笑顔だぞ！！」

「ああ…こうか…」
奏人が声をかけると、我に返ったように口許を引き上げた。

「…」

現場が凍りつく。

「あの、睨み付けないで…何かしら、恐怖でシャッターが押せない…」

「なんだ違うのか…」
不服そうに口を結ぶ。

「真央、自然に…」
「自然に笑う…か？どうやるのだ…」

「え…」

「緊張してるのネ？カワイイ！大丈夫よ！慣れてくれば笑顔も出るワ！」

隣に居たサチが真央の手を握りながらまたまたサチスマイルを向ける。

「あのオンナ…」

万里から、真っ黒いオーラが浮き出る…

奏人はなぜか悔しくなっていた。

別に真央が羨ましいわけではなく、真央から笑顔がでない。

「今朝の笑顔が出れば、問題ないんだけどな…」

せっかくなんだから、笑ってほしかった。

きっと万里も同じことを思っているはず…

というか、真央を笑わせれば万里も少しは落ち着くのではないだろうか。

「よし！」

奏人は心を決め、なかなか笑顔を見せない真央に向けられたカメラ

の後ろに立った。
「おい、真央」
そして渾身の変顔を真央に向けたのだ。
その脇には、サチを鬼の形相で睨み付ける万里。
「なっ！！き、貴様ら…」
真央がうつ向き、肩を震わせている。
成功か？
奏人は顔をあげる真央に期待した。
そして真央が顔を挙げる。
「！」
その表情は、まさに怒りそのものだった。
「バカにしているのか…」
「いえ…そのようなことは…」
二人は後ろへ一歩退いた。
その肩を母に捕まれる。
「あなたたち。邪魔はしないように！！」
その顔もにこやかではなかった。
「あは、あははっ」

「あっちにいってなさい！」

せっかくリラックスしてきたのにまた、無表情と言うよりかは、怒りの表情に変わってしまった真央。

明らかに邪魔をし、外に追い出されふてくされる奏人と万里はベンチに座った。

「この地を守護する精霊たちよ…我の命に従い、あのオンナを…ブツブツブツ…」

隣でどす黒い万里が何か呟いている。

「なあ、真央は人見知りなのか？」

「は？そんなわけないでしょ」

奏人の呟きに、万里が急に振り向く。

「じゃ、やっぱり緊張してんのかな！」

「魔王様は緊張なんかなしないわ！！」

「じゃあ、なんで笑えないんだろ。今朝はいい笑顔見せてくれたのに」

「…魔王様は…」

万里が何か言おうと口を開いたときだった。

ガラガラッ

スタジオの出入り口が勢いよく開き中から真央が走り出してきた。

「メガネ～どこだー！！」

どうやら、奏人を探しているようだ。

「どしたんだよ！！」

「おぉ、そんなところにいたのか」

「何かあったのか？」

「いや…」

服はまだ先程のままで、慌てて飛び出してきたようだ。

奏人を見つけ安心したようだった。

二人の方に歩いてくる。

「お前がいないとダメなんだ！」

「えっ！！」

「も～魔王様ったら！！」

一瞬、奏人に向けての言葉かと思い、なぜか赤面してしまうが、万里が直ぐに真央に飛び付いたので、そうではないのかと少し肩を落とした。

「そうだよな…って何で、がっかりしてんだ！！」

頭を振りながら真央を見上げる。

「も～淋しがり屋さんなんだから！！やっぱり私がいないとダメなんですね～」

「…」

真央の首にぶら下がり甘い声を出す万里など、居ないようなまっすぐな視線が奏人に送られている。

「…貴様がいないとだめなんだ…」

「えっ？！」

奏人の心臓は聞こえてしまうほどに大きな音をたてる。

「お前がいないと…」

真央の視線が奏人に突き刺さる。

真央の服装も髪型も何もかもが輝いて見えてしまう自分が恥ずかしくて顔を伏せる。

眩しくて見れない。

「なんだ、よ…」

「カナト…」

そんないい声で名前を呼ぶな！そう叫びたくなるが、声がでない。

「一緒に来て、あいつらが何を言わんとしてるのか訳してくれ。訳がわからん！」

「あ？」

思わず顔をあげる奏人に、真央は困り顔を向ける。

奏人の眉がつり上がる。

それは別に変なラブロマンスにどぎまぎし、透かしを食らったからではなく、頼りにされた、それがなんだかむず痒かった。

「わかったよ！行くぞ！！任せろ！」

真央に背を向け、スタジオのドアを開ける。

「ありがたい」

そういわれ振り向くとまた、あの優しくて柔らかい笑顔がそこにあった。

「うっ…で、出来るじゃないか！！それだよそれ！」

「お前の今の顔を見たら笑えてきた」

意地悪な顔に変わる。

「おまえなーっ！」

奏人が拳を握りグーパンチを真央の腹に軽くお見舞いした。

ニコニコしながら真央は

「お返しだ」

と、倍のビンタを返上した。

「また、一緒にやりましょ！真央くん！」

サチがまた真央の手を握りながら微笑んだ。

あれから撮影は再開され、奏人が真央をしっかりフォローする形で順調に進み、無事に終了した。

途中、真央の笑顔が眩しすぎて、現場がまたまた硬直したタイミングがあったが、素人とは思えない働きをすることができた。

3人はまだ仕事がある母とミナミを残し、サチに見送られながらスタジオを後にした。

「これが休日か…」
並んで歩きながら、真央が小さい声で呟いた。

「いつもじゃないけど、こういうのも楽しいだろ？」

「…」

「楽しくなかった…？」
「いや、そうではない」

「どしたんだよ」

「もっとこの世界のことを知りたくなった。本当にこの世界に飛ばされて、奏人に拾われて、俺は幸運だと思う」

「…な、なんだよ！！まだまだだぞ」

「まだまだ？」
「この世界にはもっと楽しいことがたくさんあるんだ！！休日の度に連れ出すからな！覚悟しろよ！」

「…ありがとう、カナト」

「たく、ほんとに魔王かよ！！てかなんで、魔王になれたんだよ」
その瞬間奏人の腹に万里の蹴りが食い込んだ。

「あんた、さっきから調子乗りすぎ！」
「いいんだ、カナトは大切な人だからな」
「魔王様…」
万里の表情は複雑なものではあったが、少しだけ嬉しそうだった。
「魔王は代々血族の継承で成っている。つまり、俺の父も魔王だった」
「だった？」
「先代の勇者に倒されたんだ…勇者との戦いは宿命だからな」
「ごめん…無神経なことを」
「俺はな、逃げ出したんだ。俺を取り巻く悪から…」
「…急に、いなくなったりしないだろうな…」
奏人は真央を見ないように小さく呟く。
「？」
今度は顔を上げ、真央の目を見ながら、口を開く。
「急にまた、元の世界に戻るなんて、そんなこと、あるのか？」
「…」
真央は悲しくも、逆に嬉しくも見える気持ちの変化をその赤い瞳に浮かべただけだった。
それ以来、その会話は続かなかった。
重い空気を変えようと、会話の内容を楽しい話題に切り替え、３人

は自宅まで歩いて帰った。

その後ろには、二つ並んだ影が怪しく見つめていることも知らずに。

そのうちのひとつが口を開く。

「み〜つけたっ…」

その存在は周りの生物を凍てつかせる冷たい眼差しを赤い瞳に湛えながら、真央の背中だけを刺すように見つめていた。

第9頁　魔王様の休日？（後書き）

万里、よく我慢しました！
て、奏人は一気に大切な人の称号をゲットしました！
そして、物語は少しだけ前に進みます。

次回はシリアス！？
真央さまたちはお休みで、アイツが再び登場します！

第１０頁　勇者様の憂鬱（前書き）

真央さまはお休みです！

その代わり、あいつがシリアスモード引っ提げて登場（「０」）／

第１０頁　勇者様の憂鬱

「面白くねぇ…」

教室の窓の外でしとしと降る雨を見つめながら皆野由紗は呟いた。
「何が面白くないんだね」
「何もかもっ！！」
「ほう…では私の授業もだな」
「げっ！！吉田！…先せ、い…」

顔を挙げると怒りマークを額に浮かべた物理の教師が由紗を見下ろしていた。
「廊下にでも立っとれ！！」
「うきゃーっ」
襟首を捕まれ、廊下に放り出されてしまった。

「んだよ…」
頭をかきながら由紗は教室の前を去った。

「で？なんで？」
「お供します」

「え？なんで？」
「勇者様のお供ですから」

いつの間にか、隣を丸々が付き従っている。
パーティーに加わったときから存在感が薄く、その甲斐あってか数々の困難を共に潜り抜けてきた。

もちろん、魔導師としての力は一流であるのだが。

しかし、戦いに身をおかない平和なこの世界で見ると益々、何故自分に付き従うのか解らなくなる。

「なぁ…」

「はい？」

「なんで俺の仲間になったんだ？」

「勇者様だからです」

それだけいうと丸々は黙ってしまった。

自分についてきたことで、まさか次元を越えこの世界で暮らすことになるなど考えてもいなかっただろうな。

怒ってんのかな？

由紗はそんなことを考えながら三階の部室階に上がる。

「やっぱ暇潰しするならここだろ」

扉を開けると、こもっていた畳の匂いが二人の間を通り抜けた。

「いいよな！！このタタミっての！！落ち着くぜ～」

茶室と呼ばれる狭い部屋の中に入るなり、由紗は大の字になって寝転んだ。

だが、見上げる天井にはなんにも写らない。

ここよりも狭いテントで野宿したことがあるが、その頃は、魔王を倒し、完全なる勇者として認められ、英雄になり、貧乏からの成り上がり生活を夢見てキラキラしていたのに。

「しがらみか…」
魔王である、真央の言葉を思い出した。
悪の象徴で、人々から忌み嫌われ、それでも巨大な国を支配し、世界を脅かす。
そんな存在であったはずの魔王は、ここでは友人に囲まれ、生徒たちには憧れの存在として好かれ、なにやらファッション雑誌に載り、注目の的。
「世界が変わるとこうも違うのか」
「そうですね～」
丸々が手に持っていた、魔王が掲載された雑誌をペラペラめくりながら心ない相づちを打つ。
「お前な！！」
雑誌をつかんで壁に投げつける。
ちょうど、真央の微笑んだ顔のページが開かれた。
じっと見つめる。
「たしかに魔王って面じゃねーな。よっぽど『アイツ』の方が…」
そう呟くと目を瞑る。
昨夜のバイトで疲れていたのか、いつの間にか眠りについてしまった。
「ん？！」
突然体の奥底になにか違和感を感じて飛び起きた。

辺りを見渡しても何もない。
丸々が壁に寄りかかり静かな寝息をたてているだけだった。
手には勇者の着ていた服と、そのほころびを直すための裁縫セットを持ちながら。

「たく、俺なんかについてきたっていい事ないだろ…」
由紗が丸々のとなりに座ると、丸々の頭がその肩に傾いて乗った。

「おいっ！！」

声をかけてしまったことに少し後悔し、このまま寝させてあげようと由紗はその肩を貸す。

「あなたとなら、幸せになれる気がしますとか言ったっけ…」
丸々が勇者と共に戦うことを決めたとき、そう言ってパーティーに加わった。

「それじゃ、俺はお前を幸せにしなきゃならねぇよな…」
なんだか、夫婦の誓いのようで由紗は一人赤面してしまう。

しばらく時間がたった。

「やっぱり落ち着かねぇ！」

先程からの嫌な気配がさらに強くなっている気がする。

隣で寝てる丸々を落ちていた雑誌を丸めて叩いた。

「起きろ！！」

「あだっ！！何ですか…バイトの時…何ですかっ！！」
ずれた眼鏡の奥の瞳が見開かれる。
由紗がこんなに近くにいたことに驚いたようだ。
「なんか変な予感がすんだよ！しかもヤバイ妖気を感じるぜ！！」
「…魔王ですか？」
「近い…」
いてもたってもいられず由紗は部室を飛び出し、走り出す。
途中剣道部の部室に寄り木刀を拝借する。
そのまま体育館裏に飛び出した。
「チッ…」
雨はさっきより強くなり、すごい音をたてながら地面と由紗にぶつかり落ちる。
視界の悪い中、目を凝らして辺りをみると、誰もいない裏手のグランドに大小二つの人影があった。
「真っ黒だぜ！！」
その二つのうち一つからは由紗の目標としていた魔王の気を感じた。
バシャバシャと音をたてながら、その二つの影に近づく。
「おい！！」

倒さなければいけない。
直感で木刀の柄を握りしめ、切っ先を向け突進した。
静かだった妖気がざわめく。
振り向いた小さい方は見覚えがあった。

「お前！！」

それに気をとられ一瞬の隙が生まれる。

「はっ！！」
「ぐっ！！」

小さい男の傍らにいた大きい男は手に持っていた体ほどもある大剣を由紗に向かって振り抜いた。

木刀を盾にしたが、その重量は半端なく、由紗はバットで打たれた球のようにあっけなく地面に吹き飛び転がる。

「んだよ、あれ」
とっさに身を引いた由紗はたいしたダメージもなくその場に立ち上がる。

「ほう…」
由紗の動きに大きな男はニヤッと笑うと大剣を突きだし猛スピードで駆けてきた。

「くそっ！！」

身体中が雨と泥で身動きが取りずらいなか、由紗は大剣からは想像のできないスピードの攻撃をかわす。

だが、木刀一本で防げるはずなくはなく、避けるだけとなってしまう。

ズルッ

相手の足元がぬかるみにはまり体勢が崩れた。

好機を逃さず由紗は木刀を顔面に向かって振り上げた。

「甘い」

相手の足ががら空きになった由紗の腹に飛んできた。

「勇者様！！」

「ぐはあっ！！」

靴の底が腹にめり込む。

そのまま由紗は後ろに数歩よろけた。

木刀は地面に転がり、由紗の口から真っ赤な血が吐き出される。

膝をつき、腹を抑え口元の血を拭いながら、目の前の巨大な悪をじっと睨み付ける由紗に小柄な男が声をかけた。

「勇者様じゃないか。そんなにボロボロになってどうしたんだい？」

小さい男が赤く輝く瞳で由紗を見下ろす。

男というよりは少年の雰囲気がある。

「よぉ二番手の登場か？」

明らかに劣性にあるはずの由紗はそれでも余裕を装った。

「残念ながら、僕の相手は君じゃないんだよ。あんたじゃ、魔王には勝てない」

「応援に来たのか？」

「誰の？」

「魔王の…」

「何を言ってるんだい？魔王は…」

少年は由紗の前に立ち威嚇するように小さな体から真っ黒い妖気を浮かべる。

「今の魔王は僕だから」

「！？」

「レベル８３は出る幕じゃないんだよ！！」

少年の横にいた男の大剣が曇り空を切り裂くように天に掲げられた。

「避けて！」

由紗がとっさに体を伏せる。

電気を具現化したような巨大な魔力の塊が由紗の上を通過した。

「ぐああっ！！」

男の大剣に電気が流れ、その体に稲妻が浮かぶ。

「やるじゃん」

すぐに身を引いた少年が丸々のほうを見る。

「馬鹿！でしゃばるな！！」

「勇者様を見捨てるわけにはいきません」

その場に凛として立つ丸々を見つめ、しばらくすると少年は二人に背を向ける。

「あはははっ！！興味ない！！」

「魔王様！！」

高笑いを浮かべ、機嫌が良さそうな少年は水溜まりの水を音の出るようにリズムよく踏みながら、大剣を持つ男と共に消えてしまった。

「勇者様！！」

丸々が由紗に駆け寄る。

腹を抱えたままその場に倒れる由紗を抱き起こした。

「馬鹿…魔力は…ためとけって、いっ、ただろ…」

「すみません。勇者様がいなくなるほうが耐えられません！」

「お前、なん、で、そこまで…」

「好きだからです」

「面白く…ねぇ…」

由紗はそのまま目をつぶり、気を失ってしまった。

第１０頁　勇者様の憂鬱（後書き）

やればできるじゃない！
由紗くん（^__^ゞ

なんか別の話みたいだ～

なんか突然シリアス？
次回はどうなるんだぁ～

第１１頁　星に願いを（前書き）

題して『七夕ＳＰ』

今回は七夕企画として、急遽書き下ろしました！

そのため、普段より倍長いですが、ご一読ください！

第１１頁　星に願いを

「おい！！」

真央は車道に向かってそう叫ぶと急に走りだし、車の前に飛び出した。

「真央！」

「魔王様！！」

一緒に居た奏人、万里、結衣、道信は真央の突然の行動に息を飲んだ。

だが、次の瞬間、車は宙を浮きそのまま着地。

何事もなかったかのように走り去ってしまう。

飛び出した真央とその手の内にある何かだけがその場に取り残された。

「え！？なに今の…」

道信だけが信じられないものを見る目で真央を見ていた。

「いやぁ！さ、最近の車はスゴいな！！飛び出した人を飛び越すなんてな！！」

「そうなの？」

奏人が苦しいフォローをするが、道信はまだ、信じられない目で真央を見る。

「魔王様！！」

万里が真央に駆け寄ると、その腕の中には一人の少女が抱えられていた。

「真央くん…勇敢…」

結衣がキラキラした目で、真央の元に向かう。

どうやら、車道に飛び出した少女を真央が救ったようだ。

「大丈夫か？ボーッと歩いていては危ないぞ」

「…」

優しい眼差しで少女を見つめる真央にその少女は目を見開く。

「…パパ…？」

ランドセルがまだ真新しく、幼いと言う印象の少女はしゃがむ真央の腕をつかみ、まじまじと顔を見つめた。

「やっぱり！パパーっ！」

嬉しそうに叫ぶと少女は真央に飛び付いた。

「はぁ〜？」

奏人の眼鏡がずり落ちる。

結衣もかける言葉が見つからない。

「なにぃ！！いつの間に！！」

「バカじゃないの！！」

可笑しな叫びをした道信を万里が叩く。

「ちょっと待て。なんだ？パパって！？」

少女の突然の言動に一同が騒然となり、当人の真央も戸惑っていた。

「やっぱりお願い事が叶ったんだ！！おかえりなさい！パパ」
少女は満面の笑みで、手に持っていた紙を真央に渡した。
その色紙には、クレヨンでこう書いてあった。

『パパと会えますように。しおり』

「しおり、と言うのか？」
「そうだよ！パパ、忘れちゃったの？そうだ！ママに教えてあげたら喜ぶよ！一緒に帰ろう？」

「どういうこと…」
「どういうこと？」
「どうってそういうことでしょ！」

「あ、今日って七夕よね！！」

結衣が手をポンと叩き、ひらめいたように呟いた。

「じゃあ、あれは短冊か！」
奏人が少女の持つ短冊を見る。

「で、願いが叶ったと！！やるなぁ！て、いつの子だ！！」
「バカァ！！」
「うがっ！！」
万里は道信を殴るとどこかへ走り去ってしまった。

「んだよ…冗談だっての…」
道信はぶたれた頭をさすりながら、真央の方を見る。
「で、どうするの？とりあえず、送るか…」

「奏人、わからないことが二つあるんだが」
「ん？」
「『七夕』とはなんだ？『パパ』とはなんだ？」
「あ～パパってのはお父さんってこと。七夕は…」
「年に一度だけ、織姫と彦星が会える日よ」
結衣が物憂げに呟いた。
「まあ、そうだね…」
「織姫と彦星？なんだそれは…この少女が俺のことをパパと呼ぶのは何故だ…」
「も～パパ、早くしないとママに怒られちゃうよ！！」
「ああ、わかった…」
「え？着いていくの？」
「解明せねばな…」

少女に引っ張られながら、真央は何も言わずに着いていく。
やがて、街の外れにある海岸近くの可愛らしい造りの一軒家が見えてくる。
その前には一人の女がたっていた。
「ママ！！」
「しおり！遅かったじゃないの…！」
その女はしおりに付き添う真央をみて驚く。
「正彦さん！？」

思いがけずその名が口から出てきた。

「しおりが、ご迷惑をかけてしまったようで、すいませんでした」

外観とマッチした洋風な内装に、ガラス製のテーブル。その上にお洒落なティーカップが並び美味しそうなケーキが差し出される。

確かに、若い母親である。しおりは二階で真央に宿題を見てもらっているようだ。

そして、母親は一部屋だけ造りの違う和室にある仏壇に目をやった。

「あの人は…正彦さんは七年前に事故でなくなりました…」

そして、その写真を見て全員が目を疑った。

遺影の写真は、まさしく眼鏡をかけた真央だったのだ。

「お父さんが、亡くなったことはしおりちゃんは？」

「あの子が産まれてすぐでしたから…写真でしか知りません。どこか遠くに行ってしまった…そう思っていると思います」

「このタイミングじゃ、勘違いもするよな…」

道信が写真を見ながら呟く。

「そう言うことか…」

「…！真央！…しおりちゃんは？」

「昼寝中だ…よほど興奮してたんだろうな…背負ってやったら寝て

しまった」

そう言うと、真央はさっさと玄関へ向かい靴を履いた。

「真央くん？」

「帰る。今なら目が覚めて、夢だったで済む」

「そんな…もう少しだけ…やっと大切な人に出会えたのに…また、別れなきゃいけないなんて…」

結衣が真央に向かって切ない表情を見せる。

「俺に嘘をつけというのか…無いものは無いんだ…」

真央は玄関のドアに手をかけながら結衣に冷たい視線を送った。

「真央くん…」

それでも、結衣は真央の目をじっと見つめた。

「…あの…お夕食…食べていきませんか？」

しおりの母が静かに真央へ声をかけた。

「え？」

結衣が振り向く。

「もう少しだけ…せめて今日だけでもあの子の側にいてくださいませんか？」

「お願い！真央くん！！」

母の提案に乗り結衣が真央の腕をつかみ切望する。

「夜眠ったときに帰ればいいじゃないか」

道信も真央に向かって声をかけた。

「…はぁ…」

真央が珍しくため息をつく。

「…奏人、母上に夕食をごちそうになると伝えてくれ…」

「真央！」

「真央くん！！」

「今日限りだ」

そう言うと、真央は開きかけたドアを閉じて、家の中に上がり階段を昇っていった。

☆☆

ちゃんと覚えている。

人間の記憶っていつかは忘れちゃうし、小さい頃の記憶なんてほとんど覚えてない。

だけど、例え断片的であっても忘れることのない記憶がある。

『思い出』

あの優しい笑顔は忘れることはない。それだけが、その人物のすべてだったから。

「ん…パ、パ…？」
夕日が差し込み部屋がオレンジ色に染まる。視界もまだぼんやりとして夢の中と区別がつかない。
手の温もりが消えそうになる。
「パパッ！！」
しおりが叫びながら飛び起きた。
目の前にはベッドに腰掛け部屋の窓から見える夕焼け空を眺める一人の男の姿。
だが、その背中には羽根が生えているように見えた。
「天使？」
しおりは目を擦りその人物をまた見た。
「起きたか…しおり」
その体には見えていた気のする羽根はない。
そして、大切な人が帰ってきたんだと思いだし何故か瞳が潤んだ。
「何だ？怖い夢でも見たのか？」
その手と手はしっかりと握られている。
だが、その手の感触にしおりは違和感を抱く。
「きれいな夕日だな…まるで海の中に溶けて消えていくみたいだ」
その言葉を聞いた瞬間、しおりは真央に抱きつく。

「イヤだ！パパ、消えないで！！」
「…あぁ…」
しおりの頭を撫でながら、真央は少し困った表情を向ける。
「しおり、夕飯の時間だ。下へ降りよう」
「…うん！！」
「あ、しおりちゃん！！私たちも一緒にいい！？」
夕飯の手伝いをしていた結衣が優しく笑いかける。
「いいよ！」
そして、食卓は賑やかなものとなった。
「あのね、パパ…しおり小学校でね…」
しおりはとても楽しそうに真央に話しかける。
真央も気負わず、普段通りにしおりと話している。
「なんかこう見るとホントの家族だな…」
奏人の隣に座った道信がこっそり呟いた。
「あなた、おかわりは？」
しおりの母がつい口走る。
「あっ…」
全く違う人間にそう言ってしまい戸惑いの表情になる母を、しおりは眉をひそめて見上げている。
「…貰おうか」

「パパって食いしん坊さんなんだね！」
とっさに真央が庇うように口を開き、茶碗を差し出したのを見ると、しおりは笑顔に戻った。
楽しい食事の時間もすぐに終わってしまう。
すると、しおりが真央の腕をつかんだ。
「どうした？」
「ううん。なんだか、捕まえておきたかったの」
「…」
首を振り下を向くしおりに真央は、真剣な眼差しになる。
「お前の父は何処へも行かない」
一同は真央の台詞に驚く。
「しおり、散歩に行かないか？」
突然、真央がしおりの頭に手を置いて笑いかけた。
「真央くん！？」
結衣が引き留めようとするのを、奏人が遮る。
「行ってきなよ…」
「奏人くん？」
「…では行ってくる。ありがとう、奏人」
奏人に笑いかけると、真央はしおりと手を繋いで外に出ていった。
不安そうにドアを見つめる結衣に奏人は話しかける。

「真央に任せよう。あいつは人の夢を踏みにじるようなことはきっとしないよ」

ほんの何日間かでも、一緒に過ごしてきた奏人には真央が信じられた。

「せっかく出会えたのに…また、『思い出』に戻っちゃうなんて…」

結衣の瞳に涙が浮かんだ。そして、奏人を見上げる。

「…だれ？」

「へ？」

奏人の顔から眼鏡がなくなっていた。

静かな波の音が何となく寂しく響く。

「きれいな空だな」

見上げれば満点の星空。

手を伸ばしたら掴めそうなほど、海の向こう側までキラキラと星が散りばめられている。

「…」

「どうした？」

「パパって…」

しおりが口を開いたその時だった。

「魔王さ～ま～」
「マリー！？」
「お迎えに来ましたわ！！」
「ダメ！！」
しおりが真央の前に立ち両手を広げた。

「パパを連れていかないで！」
「しおり…」

「パパって…天使になっちゃったんでしょ！？」
「？」

「しおりのお願い事叶えるために…今日だけ…お空から降りてきてくれたんでしょ？」

「…」

「だけど、パパとずっと一緒にいたいよ！」

しおりの瞳から、大粒の涙が溢れ出した。

「パパとママとずっと居たいよ！！」

しおりは次から次へとあふれだす涙を腕で拭う。

目の前で懸命に片手を広げるしおりを真央は見下ろす。

そして、その小さな体を抱き寄せた。

「すまん…」

「？」

「騙すつもりはなかったんだ…俺はお前の父ではない。」

「…」

「だが一夜だけでも、夢だったとしても…しおりの願い事を叶えてやれればそれでいいと思っていた…」

真央は更に言葉を続けた。

「俺も父を失った。家族を思う気持ちは何者にも変えられない。だが、無くなったものをいつまでも追い続けていては前には進めない…」

「魔王様…」

その言葉を聞き万里は力なくうつ向いた。

そして、しおりの肩を引き離し、涙でくしゃくしゃになったその顔を優しい目で見つめる。

「泣くな…お前の父は何処へも行かない、お前が思い出に残す限りここにいる」

真央はしおりの胸元を指差し、涙を拭った。

しおりは自分の胸元に手をやり目をつぶった。

「…うん…」

本当は心のどこかでわかっていたのかもしれない。
ただ認めたくなかった。

誰も言ってくれなかったから。
知らないフリをし続けた。

覚えているのは父の笑顔だけ。
しおりにはもうそれだけで十分だった。

流れ星が空を滑り落ちる。

その時、真央が突然頭をガクッと落とした。

「…パ…お兄ちゃん？」
しおりは真央の異変に首をかしげる。

「し…おり…」

真央が制服の胸ポケットから眼鏡を取り出してかけた。

「ああ…これでよく見える」

「？」

その優しい笑顔は明らかに真央の笑顔とは違っていた。

「パ…パ？」

「しおり…ごめんな…淋しい思いをさせて…」

「パパ！！」

しおりはその胸の中に再び飛び込んだ。

真央の体はしおりの体をきつく抱き締める。

その表情には愛しさと、悲しさが混ざる。

言葉もなく時間が過ぎた。

「あんまり、ここにはいれないんだ」

「…やっぱり…お空に帰っちゃうんだね？」

「ああ、だけど、パパはずっとしおりとママをお空から見守っていたんだよ。もちろんこれからも…」

「しおりも、パパを忘れないよ！お空にいても、パパはパパだもん。ずっとパパだもん」

「…ありがとう…愛してるよしおり」

「しおりも、大好きだよ！」

眼鏡の奥が光り、涙がその頬を流れ落ちる。
「しおりは絶対幸せになる！パパがついてるからな」
「うん！」
「しおりと話ができてよか…った…」
そう言うとその体はしおりにもたれ掛かり力を失った人形のようになった。
「パパ？…パパ…」
「…ん…なんだ、視界がぼやけて…しおり？」
「魔王様…」
万里がしおりと共に真央の体を支えた。

「しおり！！」
「ママ！」
そこへしおりの母と結衣、道信、眼鏡のない奏人が様子を見に家から出てきた。しおりは真央の横を走り去り、母に駆け寄る。

「魔王様、今のは…」
「わからん、体を奪われた感じだった…」
「眼鏡姿も素敵です…」
万里は涙と鼻血を垂れ流しながら真央に抱き付いた。
「真央くん！」

「真央…」
「結衣、メガネのない奏人…」
しおりは真央から離れた。
それだけで、真央はしおりの背中を押せた気がした。
「お兄ちゃん！」
「？」
母と手を繋ぎ、笑顔のしおりが真央を呼んだ。
万里をぶら下げながら振り向く真央に、しおりは叫ぶ。
「ありがとう！天使のお兄ちゃん！お願い事叶えてくれて！」
「！」
「天使ですって！！何て口を！」
「いいんだ、マリー…」
優しい微笑みを向けながら真央は自分の胸に拳を突きつけると声をあげる。
「忘れるなよ！」
しおりも同じ動作をしながら笑顔を返す。
「うん！」
そして、母は真央たちに深くお辞儀をするとしおりと共に家に入っ

ていった。

「正彦さんと、詩織ちゃんが出会えたように、織姫と彦星も出会えたのかな？」

結衣が星空を見上げながら切なく呟く。

「一年に一度じゃなくて、ずっと一緒に居れたらいいのに…」

「年に一度でも…会えるだけで、幸せと感じるだろうな…」

真央が言葉を返す。

その言葉を聞いた結衣は真央の顔を見るとまた、空に視線を移した。

「そうだね…」

「じゃ、俺もお願い事！かわいい彼女ができますように！」

「なにそれ！！私は、魔王様と結ばれますように～」

「え？それ、無理じゃないか？」

「私は…奏人君たちとこれからもずっといれますように！」

「えっ！結衣ちゃん！？それって…」

奏人は今までの結衣の言動が奏人との事ではないかと思い、真っ赤になった。

「ゆでダコ…『たち』って思いっきり付いてるけどね…」

道信がにやにやしながら奏人を肘でつつく。

「奏人…お前は？」
真央が奏人を見ながら訊ねた。
「そうだな…これからも笑って毎日を過ごせますようにかな！？…真央は？」

「俺か俺は…とりあえず、メロンパンを腹一杯食べたいな！」

「なんだそれ！て、言うか、早く眼鏡を返せ！」
「それが願いか！叶えてやったらメロンパンな…」
「んなもん、いくらでも買ってやるわ！…うがっ！」
「メガネ！！口の聞き方に気を付けなさい！」
「本気で蹴るなよ…」

万里に蹴られた腹を押さえながら奏人は、空を流れる天の川の両側にひときわ輝く二つの星を見上げる。

周りを見ると、真央も、万里も、結衣も道信も皆、同じ空を見上げていた。

皆さんにも幸せな未来が訪れますように☆あらた

第１１頁　星に願いを（後書き）

長々とお付き合いいただきありがとうございます！！

こんな迂回とてもやりたかった！！

また、機会があればやらせていただきます！

その時も是非お付き合いください！

次回は一旦本編へ戻ります（ｏ｜）／

ではまた、お会いしましょう☆

第１２頁　異変（前書き）

一ヶ月ぶりの更新です！！

お遊び回から一変し、物語の重要な内容が詰まってます！！

どうぞ、ご覧ください！

第１２頁　異変

ジメジメとした梅雨も終わり、日差しがじりじりと教室内に射し込む。
扇風機もやる気をなくし冷たい風を送らない。
暑さでやる気も出ず、ぼーっと授業を受ける午後。
奏人はふと真央の方を見る。
やはりぼーっとただ外の真っ青な空の向こう側を眺めているようだった。

「帰りたいのかな…」

真央はこの世界ではないところから来ていることを思い出す。
楽しそうに過ごしてはいるが、やはり故郷と呼べる場所へは思いがあるのだろう。

「いなくならないよな」

その問いかけには答えは帰ってこなかった。

ここまで、巻き込んでおいて、あっけなくさよならなんて腹立たしい。ような、寂しいような。

せめて前兆があってほしいものだが。
きっと真央にも万里にも先のことはわからないのだ。

「なんかなぁ」

こう、蒸し暑いとじっと何かを考えているだけでも汗が出てくる。
なにか楽しいことを探さなければ…

「メガネ、ジメリ過ぎて曇ってるぞ…」

いつの間にか万里が奏人の眼鏡を近くで見つめながら呟いた。

「いつの間にっ！！」

「もうとっくに授業終わってるわよ！！」

周りを見れば帰り支度をするクラスメイトが数人いるだけで、ほとんど誰もいなかった。

「かなとくん！！」

「出たわね！！」

やって来た結衣に目からビームを飛ばす万里。

そんなことお構い無しに結衣は奏人の前に来ると、信じられないものを見たような表情を浮かべ、吐き出すようにしゃべった。

「勇者さんが、あ、由紗さんが大変なんだって！なんか、事故に遭って学校に来れないくらいの大怪我なんだって！！なにか関係あることないよね？」

「あはははは！お間抜け勇者だこと」

万里が全力で嘲笑う。

「勇者には最近会ってないし、ケンカもあれ以来無いと思うけど」
そう言えばもう一組、異世界からやって来たのがいたが、最近はめっきりバイトに勤しんで姿を見せない。

その程度の認識であったが、まさか、事故に遭ったとは。

奏人は眉間にシワこそ寄せるが、由紗はタフそうだし、そんなに心配はしていなかった。

「て、誰から聞いたの？」

「私です」

「！！」

無論さっきからいた。

言うまでもなく全員がビックリするが、皆気を使い驚きを隠す。

「たしか…」

「丸々です。事故ではなく、勇者様は魔界のものと戦いました」

「なんですって！？」
万里が神妙な顔つきになる。

そして全員の視線が真央に向けられた。

「真央…」
窓の外をほおずえをつきながら眺めていた真央が皆の視線に気づきゆっくりとこちらを見る。
「…誰だ…」
「え？」
「…我輩を呼び捨てにしたのはぁ～っ！！」
「真央？」
「貴様かぁぁ～っ！！」
ビシッ！
突然立ち上がり、奏人を指差し、いつか見た怒りの形相を向ける。
「？！」
そこには皆の知る真央の優しい顔はなかった。
バンッ
椅子の上に片足をのせると丸々を指差す。
「ほぉ～勇者のパーティーのものかぁ！！一人で来るとはいい度胸だ！！我輩、直々に相手してやるわ！！」

「…」

すると突然、真央の動きが止まる。

突き出した指をじっと見つめ、手を握った。

「…真央…？」

奏人は顔面がひきつるのをこらえながら、声をかける。

「…なんだ？皆どうしたのだ？まるで魔王でも見るような目だが…」

いつもの真央が戻る。

「魔王様…」

真央は、今起こったことを覚えていない様子で、むしろ、真央が周りの反応に驚いている。

万里だけは、先程から真剣な顔になっていた。

「万里、鼻血が…」

「魔王様〜！やっとお目覚めになられたんですね！！」

鼻血を、垂らしながら、真央に抱きつく。

「なんなんだ！！」

誰も皆訳がわからず、万里だけが興奮状態にあった。

「真央くん？」

そして、真央の顔色が悪くなる。

急にその瞳から生気がなくなり意識を失った。

その場に落ちそうになったのを奏人が受け止めた。

「真央！どしたんだよ！」

「覚醒？」

「そうよ…ずっと抑え込んでいた魔王の血が、どうやらその魔界の者の登場によって、危機を感じ、悪の力が魔王様の体内で湧き出したようね」

「抑えるって…楽なことなのか？」

「無理が祟ったみたい…こうなるのよ…」

保健室のベッドで静かに眠る真央に万里は視線を落とす。

「真央…」

奏人にはどうすることもできなかった。
どうすることもできない自分が悔しい。
「魔界に戻って血に抗わず魔王になれば…」
万里が静かに呟く。

「俺は、…魔王には…ならない…」
少しぼんやりとした虚ろな瞳で保健室の天井を見ながら真央が呟く。
「奏人…ここは？」
意識を取り戻した真央が奏人に訊ねた。
「保健室。急に倒れたんだ…大丈夫なのか？」
「あぁ…もう、大丈夫だ…帰ってゆっくり休もう…」
奏人に笑いかけると、真央はゆっくりと起き上がる。
だが顔色はよくなっていない。
「奏人、結衣、カバンをとってきてくれないか？」
「え？ああ、そうだね。万里の分も教室に置きっぱなしだ」
「よろしく～」
万里はなぜか嬉しそうに二人を見送る。

奏人と結衣が出ていってしまうと、万里は真央に向き直る。

「魔王様…」

真央の腰かけるその横に座り、肩を寄り沿わせ、その瞳をじっと見つめた。

真央も万里を見つめる。

万里があごを引き上げ目を瞑り、唇を寄せようとした。

真央が万里のほほに手を当てる。

「どういうことだ…」

「う〝…」

真央が万里の頬を握り万里のお楽しみは終了。

真央の冷たい視線が万里に刺さる。

「か、覚醒されていましたよ…。もう一組魔界からこの世界に来たと。勇者の付き添いの女の…」

「丸々です」

「そう丸々の話だと、勇者とやりあった魔界の者は…」

「俺が魔王だ、そう言っていました。大剣を扱うものと二人、勇者様の話だと…」

「…虎太郎か…」

「魔王様を追いかけてやって来たのでしょうか？」
「俺の体の中で、魔王の血が騒いでいる…」
真央は胸元に自分の手を当てる。

「て、いうか！」
「？」
「あんた居たの？」
万里が冷たい視線を丸々に送った。

「真央くん大丈夫かなぁ…」
「やっぱり心配？」
教室に向かう廊下で奏人と結衣はならんで歩いている。

「心配…」

うつ向き気味に結衣は呟いた。

「あんな真央くん、見たくないよね？奏人君も…」

「…そうだね。なにか助けてあげられることないかなぁ…」

突然、叫び出したり、倒れたり…

ホントに急すぎて奏人は混乱していた。

これを機に魔界とやらに二人は帰ってしまうのだろうか…
そう思うと、気が気ではない。
そして、結衣と二人きりで誰もいない廊下を歩いていると思うと、余計に緊張してしまう。

「奏人君…」
「へっはい！？」
結衣に呼ばれ、変な声を出してしまう。

「奏人君は優しいね。真央くんもそんな奏人君だから、いつも一緒に居れるんだろうね」
結衣の言葉に奏人の顔面は真っ赤に茹で上がる。

「羨ましい…」
「えっ…それって…」

「ふふっ！私だって一緒にいたいのに…」
結衣の頬がほんのりと赤らむ。

「はあ、やっぱりそうだよな…」

「え？」
「あんな容姿も、性格もいいやつモテないわけないよな…」

「え？」

半ば諦めかけていた想いに踏ん切りをつけたかのように、奏人は結衣をまっすぐに見つめた。

「応援する…」

「奏人君！？」

吹っ切ろうと奏人は心にないことを言ってしまう。
こうした方がいいとどこかで納得しながら。
そして、教室から、真央の鞄を持ち出した。

「メガネ！遅いわよ！！」

万里がいつもの、人を小バカにしたような目をしながら、歩いてきた。

「万里！…真央…」

その後ろには真央の姿がある。

「心配かけたな…」

「大丈夫なのか？」

奏人は隣にいた結衣の背中を押して真央の前に鞄をつき出させた。

「結衣、ありがとう」

「真央くん…」

奏人はその光景を見ながら一人感慨に浸る。

いつか真央はいなくなるんじゃないか？
その時結衣は真央に対する思いを断ち切らなければならない。
罪悪感がない訳じゃないが、それでも結衣には幸せな思いをしてほしかった。

「魔王様！？」
「真央くん？」
万里と結衣が真央に声をかける。
結衣が膝をつき、胸を押さえて呼吸を整える真央の背中に手をやった。

「く…近くに…はぁ…居る…」

苦しそうに、なにかを抑えこみながら、真央が辺りを見回した。

「やっと気づいた？」

感情のない声。

その声が廊下に冷たい空気を運んだ。
辺りは急に寒くなる。

まだ夕日が差し込み明るいはずなのに、その一帯は暗闇に包まれた。

軽やかに歩く靴音だけが、その場に響く。

立ち上がれない真央の前に顔を恐怖に歪めながら万里が立った。
感じたことのない冷気に、心臓が凍りつき割れてしまいそうだ。
結衣が奏人の腕を掴み、体を震わせる。

「大丈夫」

結衣に声をかけたが同時に自分にも言い聞かせた。

「奏人、結衣、オレの後ろに…」

魔王の血が真央の体内を駆け巡る。
抗わなければこちらには戻れない。
必死に耐えながら、真央は立ち上がり、正面に立ちはだかる、冷たい微笑みを湛える一人の少年と向き合った。

「…虎太郎…」
「やあ、兄上」

二人の呼び掛けは奏人たちにもはっきりと聴こえた。

確かに、同じ髪色に、赤い瞳。どことなく顔が似ている。
しかし、虎太郎と呼ばれた少年はあまりにも冷たい眼をしていた。

「何の用だ？」
「わかってんだろ？」
「…オレか…」
「アンタは邪魔なんだよ。いつもいつも…死んだと思ったのになぁ…」
虎太郎と呼ばれた少年は微笑みながら、視線を窓の外に移す。
「だけど…この世界は面白いね。アンタが居座るのがわかる気がする」
虎太郎が話をする度に辺りの気温は下がる。
「お前…」
「ぶっ壊してやるよ！」
「！」
「あんたの大事なもの全部！！」
虎太郎が片手を前に掲げた。
「虎太郎！」

その手のひらから見たことのない真っ青なエネルギーのかたまりのようなものがこちらに向かって放たれた。
間違いなくあれに当たれば消し去られてしまう。
奏人は無意識に結衣を抱きしめ庇った。

「動かないで！！」

万里が青い球体の前に飛び出し、両手をかざし同じく青い球体を出現させる。

「スゴい…」

奏人の腕の中で結衣が万里の放つエネルギーの大きさに目を見張った。

虎太郎の放つそれよりも遥かに莫大であっという間に小さい方は消え去る。

廊下を削りながらさらにその固まりはスピードをあげ前に進む。

「魔王様っ！！」

光球の先に一人の男が現れ、その体ほどもある大きな剣を盾にし、虎太郎をかばうのが見えた。

だがそれも暫くして残像に変わる。
万里の放った球体が消えた。
そこには人の影すらなかった。
「…追い払ったようね」
振り返る万里の髪が金髪に戻っている。
「真央くん！」
結衣が直ぐに真央に駆け寄った。
微かに息をしながら、真央はボロボロになった廊下に倒れている。
「大丈夫…だ」
真央はふらふらと体を揺らしながら立ち上がる。
「アイツは？」
「すまんな、奏人。ただの兄弟喧嘩だ…」
「兄弟喧嘩？」
「アイツはオレの弟の虎太郎…」
真央の体が傾く。
それを奏人が抱き止めた。
「わかった、あとで話聞くから、今は黙って」

奏人はとりあえず、今はもう何も起こらないと確信し、そのまま真央の体を支えた。

「おい…」

奏人の行動に真央は恥ずかしそうに戸惑う。

「いいだろ、これくらいさせてくれよ」

「…すまん」

真央は嬉しそうに微笑んだ。

「てか、これ、どうすんだよ！！破壊するなよ、学校を！！」

「大丈夫です。私が何とかしておきます」

そこに丸々が現れ、何かを呟くと両手を広げた。

その周りから、キラキラと白い光が現れ辺りを包み込む。

そして、みるみる現場が修復されていく。

「便利だな」

「無機質な物体ならなんとでも…人の怪我もできると良いのですが…」

丸々が視線を落とす。

「全て…オレのせいだ。勇者にも謝らなければならないな…」

真央の顔が悲しみで曇る。

「…」

「そんなことしないで！」

丸々が珍しく声を荒げた。

よくわからないが、真央は全てを背負い込もうとしている。

奏人はそれは許せなかった。

「真央、お前は、魔王じゃない。僕の大事な友達だ。頼りないのは分かってるけど…今まで通り、頼ってくれよ…」

精一杯の強がり。

役に立たないのはわかっているが、真央にあんな悲しい顔をさせたくない。

「奏人…」

奏人は真央の体をしっかりと掴み口をへの字に結びながら前に歩き出した。

第１２頁　異変（後書き）

万里さ～んという感じです。
シリアス回から次回はまた、お楽しみ回を作成中です。
夏が終わる前に！！

では、お付き合いいただきありがとうございました！

第１３頁　すれ違う心（前書き）

３か月ぶりの投稿です！！
夏の弟君登場から、季節は流れ…奏人たちは紅葉を見にお出かけしますが、そこで…
久しぶりだったので張り切って長めになってしまいましたが最後までお読みいただけると光栄です！

第13頁　すれ違う心

「で、なんであんたが居るのよ…」
7人乗りのワゴンの中で、万里が真央の腕を掴みながら反対側に座る存在に話しかける。

「いいじゃないですか～、あのモデルのサチさんとご一緒できるなんて、なんて貴重な時間なんだ！」
助手席から道信が顔を後ろの席へ向けながら、嬉しそうに言った。

「たまにはたくさんでワイワイ出かけるのも楽しいでしょ？」
奏人の母の妹でありカメラマンのミナミが、ハンドルを握りニコニコしながら言葉をかける。

「そういう問題じゃないんですぅ！」
万里が口を尖らせながら更に真央に密着した。

「真央…両手に華…羨ましい！！」
道信が悔しそうに呟くがもちろんそれを拾うものはなく、寂しそうに肩を落とす。

「聞いてるの？離れなさいよ！」
万里が真央越しにサチを睨み付けた。
そして、黙っていたサチがやっと口を開く。

「真央？お隣は妹さんよね？万里ちゃん、お兄さん離れするときが来たわよ！手を離してあげて…」
サチも真央の腕に自分の両手を絡め、真央を引き寄せた。

「はぁ？」
上から目線が気に入らなかったのか万里の眉間のシワは更に深くなる。
万里も無言で真央を引き寄せた。
負けじとサチも真央を引っ張る。
二人の奪い合いが高速道路を走行する車を揺らした。
「いい加減にしなさい！」
そんな様子に、耐えられずミナミが一喝する。
「！」
「…はい」
その迫力に二人は真央から手を離し大人しくなった。
「はぁ…ごめんね、真央くん…」
「いや…」
だが何故か真央の表情は穏やかだった。
「ところで、奏人君？生きてる？」
ミナミの一言で皆が三列目に座る奏人と結衣に目を向ける。
「うぅ…だ、だいじょう…」
そこには真っ青な顔をして気を失いそうな奏人と、それを心配そうに見守る結衣が居た。
「大丈夫？前の席に…」
結衣が話しかけると奏人は顔を上げ笑顔を作る。
「大丈夫だよ！！」

昔から、奏人は車に弱い。
一番前に座る予定だったのだが、前の三人は見張っていたいし、道信に結衣の隣は譲れないし…
自分が我慢して真央のとなりに座れなかった結衣をフォローするつもりが逆に結衣に面倒をかけてしまい情けなくなる。

「と、いうわけで、この状況はなんだ？」
沈黙を打ち破ったのは、真央だった。

「い、いまさら！？」
酔いざましに奏人が突っ込みを入れるがあまり声を張ることができずに車の音にかき消されてしまう。
奏人の本領は全く発揮されず車内も締まりのない雰囲気となっているのだ。

「天気もいいし、私も、サチもお休みが重なったから出掛けたかったんだけど、女二人じゃ味気ないからね…迷惑だった？」
ミナミがなんとなく意地悪な表情で呟いた。

「紅葉狩り…とはなんだ？こんな軽装で大丈夫なのか？」
「？」
「狩りって、その狩りじゃない…」

いつの間にか車は高速道路を抜け山道を走行し始める。
まだ、緩いカーブが続いてはいたが曲がる度に奏人の顔色は青くなっていった。

「奏人くん？」
「…」

結衣の声にももう反応できない。
「うきゃあ～っ魔王さまぁ～」
「あ～っ真央っごめ～んっ」
前の列では、カーブを曲がる度に万里とサチが交互に真央に体を押し付けている。
その光景に道信はひたすら、羨望の眼差しをむけるだけだった。

「あ、奏人、ごめん！」
ミナミが大きな声を出した途端車が大きく傾く。

「うわあぁ～っんむ」
「ふぇっ」
気づけば奏人は結衣に抱き止められていた。

「うわぁぁ～ごめん！うがっ！！」
「奏人くん！！」

慌てて身を引いた瞬間、今度は反対側に遠心力がかかり奏人は吹き飛び、頭をぶつけシート下に挟まった。

良くも悪くも奏人は気を失ったまま、目的地に到着することとなった。

「う…ん？」
ぼんやりとする視界の中、天使のような優しい笑顔が奏人に向けられている。
そして柔らかい枕に、安心しもう一度目を瞑った。

「奏人くん？」
優しい声が奏人を呼んだ。
「結衣ちゃん…ごめん…」
夢か現実かわからないまま奏人は声の主に話しかける。
「僕なんかにつき合わせちゃって…」
「…」
ばしっ
「いてっ…」
天使に額を叩かれる。
そして現実に返る奏人。
「結衣ちゃん！？」
そこにいたのは頬を膨らませ不機嫌な表情を浮かべ奏人を睨み付ける結衣だった。
「奏人くんのばかっ」
「え？？」
全く意味が分からず目が点になる奏人を残し、結衣は車を出た。
あわてて奏人も後を追った。
暖かい日差しが二人を照らすが、山中とあって空気が冷たい。
身が引き締まる気がした。
辺りを見回すが、すでにそこには真央たちの姿はない。
「みんなは？」
「…奏人くんが寝てるから先に行っちゃったよ」

やっと奏人は成り行きを思い出した。
同時にぶつけた後頭部が痛み出す。

「いてて…」
「…大丈夫？」
結衣が今度は心配そうに覗き込んできた。

「大丈夫だよ」
これ以上は心配をかけられない奏人は頭を押さえながら笑顔を作る。

「しかし、先に行くなんて、薄情な奴ら…」
「あのね…私が先に行ってって頼んだの…」
結衣が少し頬を赤く染めながら下を向いた。

「え？良かったの？」
「…もうっ！奏人君て…」
何かを言いかけたが、結衣は口を閉じて後ろを向いた。

「え？何？なんなの？」
「！しらないっ！」
「気になる…」
「そ、そんなことより！見て！真っ赤だよ！」
結衣の顔も真っ赤だったがその背景の山を彩る紅葉に奏人は目をやった。

「ほんとだね！！」
二人は燃えるように色づいた山々にしばらく無言で見入る。
結衣が手元から山道の地図を取出し奏人に見せた。

「ここで、お昼に待ち合わせしようって！」

山の中腹あたりに休憩所があるらしく結衣はそこを指さした。
「て、ことは…二人きりか…」
「なんか、デートみたいだね…」
結衣が、先ほどの天使のような笑顔を奏人に向ける。
「デ、デ…デデデー…！」
一瞬にして脳内がパニック状態となる奏人。
「さ、いこっ！」
だが結衣は嬉しそうに奏人の手を引っ張った。
「ちょちょちょ…！！」
奏人はリュックを掴むと結衣に引きずられるように歩き出す。

「だから！なんなのよ！」
「こっちのセリフです！」
「じゃあサチさんは、僕と行くということで！」
「真央！妹さんが可哀想よ。いつまでもお兄さんにしがみついていては前に進めないわ！」

「あ、普通に無視された」
「あはは、道信君、残念だったね」
「手を放しなさいよ！魔王様が嫌がっているのがわからないの？？」
「どっちが！」
車内の状態と変わらないやり取りが、赤く染まる葉を携えた木々に囲まれる山道に響いた。

「しかしきれいだな…」
真央が目を細めながら、両脇の二人に目を配る。

「えっ??」
「魔王様…」
完全に勘違いする二人は口を閉じ紅葉よりも真っ赤に顔を染めた。

「真央の一言の破壊力…」
道信が感心するように呟く。

「きれいな色合いだな…これが紅葉というものか…」
と、付け足したが、そんな言葉は万里とサチには届かなかった。

「奏人たちは、大丈夫だろうか？」
真央がミナミに訊ねる。

「地図置いてきたし、単純な道だからねこっちがゆっくり上がって行けば、合流できるでしょ」

「そうか…」
「ちぇ奏人も今ごろ結衣ちゃんとルンルン気分で歩いてるんだろうな…」
道端の落ち葉を蹴散らしながら口を尖らせる道信を見ながらミナミは口を開いた。

「あの二人は、あれくらいしないと進展しないでしょ」
「…ですね」
立ち止まり、道信も同意する。

「どういうことだ？」

「…真央君…あんたさ、恋とかしたことないの？」
何気ないミナミの一言に万里と、サチは即座に反応する。

「ちょっと！魔王様はそんなことに興味はないの！」
「いや～っ…聞きたくない！万里ちゃん！どっちがお昼を一緒に食べるか競争よ！先に休憩所に着いた方が勝ち！いい？よーい！どん！」
「は？？待ちなさいよ！勝手に決めないで！」
突然サチが万里に勝負を挑み、万里も断る余裕なく、二人は山道を駆け上がって行ってしまった。

「はあ、サチも、そういうところがあるんだよね…大事なところから目をそらす。そのために今日企画したのに…あ…」
道信の冷めた視線にミナミは口を塞ぐ。

「そういうことでしたか…」
「あんただけね。ちゃんとした感性を持ってるのは」
「お褒めに預かり光栄です！」

「だから、なんのことなんだ？」
真央だけが意味が分からず先ほどからずっと眉を寄せている。

「…真央君、道信君」
急にミナミが真剣な表情になった。

「はい？」
「なんだ？」

「奏人をこれからも頼むね」
そして、真央と道信に笑顔を向ける。

「え？」
「奏人はあんたたちと一緒に過ごしててなんだか変わった気がする」
「ミナミさん」
「そうなのか？奏人は奏人だが」
「真央君、あんたが何者かはわからないけど、いつも一人どこか一線を引いて他人と付き合っていた奏人が、君や道信君たちと同じところに立って弱みを見せたり引っ張って行こうとしたり出来るようになってきたのは、あんたたちの影響だからね。責任とってね」
秋の空のようにすがすがしく微笑むミナミ。
「…ミナミさん…カッコ良すぎです」
「俺は、奏人にはいつも助けてもらっている。出来ることがあれば、アイツの望むことは、叶えてやりたいと思っている」
「よろしくね」
そういうとミナミは暴れる女子の後を追いかけて行ってしまった。
残された真央と道信も歩き出す。
「…まあ、俺らは、そういう感じで、つながってるわけだ…お前が何者でもお互いに…ん？なんだよ…」
道信が照れながら真央に顔を向けるが、その表情は先ほどまでとは打って変わって、恐ろしいものでも見たかのような顔となっていた。
「なぜだ…」
「は？なぜって…奏人は共通の…」
「油断していた！アイツ！こんなところまで！」

険しい表情のまま、真央は登ってきた道を振り返ると、道信を残し山道を駆け降りて行った。

「どういうことなんだ？」
「あの子って…真央君の？」
奏人に手をひかれ結衣が後ろを振り向きながら訊ねる。
地面を踏み込む度に、落葉が乾いた音をあげた。

「そうだけど、なんで僕らを！」
「きゃっ！」
「結衣ちゃん」
奏人の手から結衣が離れる。
振り返ると道に倒れこむ結衣の姿と、ゆっくりと近づいてくる黒い妖気のような塊。

「もう終わり？」
こんなところで、聴くはずのない声が二人の足音を楽しそうに追いかけている。

奏人は慌てて結衣の元に駆け寄りその手を引き上げた。

「とりあえず登ろう！合流できるはずだよ！」
「うん…」
だが結衣の膝は擦り切れ血が滲んでいる。

「結衣ちゃん…」
「大丈夫だから」
結衣の表情は明らかに痛みを我慢している。

そんな結衣を引っ張り続けるのを奏人は一瞬躊躇う。
「そんな荷物を抱えてたら、逃げ切れないよ」
真後ろから冷たい声が囁いた。
「なんでなんだよ！」
とっさに結衣を自分の後ろに押し隠し奏人はその声の主と向かい合った。
結衣は奏人の腕をしっかりと掴む。

結衣との二人きりのデートのはずが山道に入った途端にまるで次元がゆがんだような感覚があり、空気が変わった。
そして、直後に少年が二人の後ろに現れたのだ。
あれに捕まってはいけないと、瞬時に奏人は結衣の手を引き山道を駆け上がり始めた。
あたりには全く人がいない。
気配すらもなく、ただひたすら逃げる鬼ごっこをしているようだった。
二人を追い詰めるでもなく、少年は浮いているように落ち葉を踏む音もなく楽しそうに追いかけるだけ。

そして、しばらくの逃走ののち、いま、その存在は優しい瞳の真央とは違い冷酷な眼差しを向け奏人の前に立っている。
少年は涼しく笑う。
「言っただろ…アイツの大事なものは全部ぶっ壊すって…」
少年はそういうと奏人に向けて手を振り上げた。
「んなっ！うわあぁ！」

次の瞬間、奏人は数メートル上空に浮かびあがる。
「奏人くん！！」
結衣が空中の奏人に手を伸ばすが届かない。
メガネが地面に打ち付けられ割れる音がした。
奏人も同じ状態になるであろう高さから風を切り落下し始める。
いつかの、空から落ちる感覚を思い出した。
あの時にアイツと会わなければ終わっていた奏人の人生を、ゆっくりと流れる時間の中、回想する。
目前に映る真っ赤な景色が視界を流れていった。
もう終わりか。
だが、今回も奏人の人生はアイツに救われる。
「え…真央…？」
空中で奏人をしっかりと抱き止めると、怒りの表情を湛えた真央は地面に着地した。
「大丈夫か？奏人…」
ほんの少しだけ優しい微笑みを見せると、奏人を降ろし二人の前に立つ。
そして、意外なものを見たという顔をしている少年と向き合った。
「虎太郎…こんなところまで追いかけてきて…」
「…ふん」
計画が上手くいかず機嫌を損ねたような虎太郎の表情は、拗ねてい

る様にも見える。

「お前、そんなに俺を怒らせたいのか…」

「…いい表情だね…憎しみに満ち溢れた顔…やっぱり悪の血は健在なんだ」

真央の魔王らしい雰囲気を、虎太郎は鬱陶しく感じ、皮肉を込めた。

「貴様…」

真央の体から黒い湯気がゆらゆらと浮き上がる。

だが、その瞳からは迷いが感じられた。

「…いや、今日は帰るよ。あんたがまだ悪の血をその体にちゃんと持ってることが確認できたし、それに、あんたの大事なものも…」

虎太郎はそういいながら視線を奏人と結衣に移した。

「じゃあね、また遊んでね」

そう言い残すと虎太郎は、落ち葉を巻き上げながら風の中に消えてしまう。

「奏人、結衣…すまな…」

「真央くん！」

振り返ろうとした途端、真央は膝をつき苦しそうに呼吸を整える。

結衣が駆け寄った。

真央の血色はやはり悪く、湧き上がってくる力を抑える事の辛さを感じさせた。

「真央…」

奏人はその場にただ佇む。

「結衣、その傷…」
真央が結衣の膝から赤く流れる血に目をやった。
「ちょっと、転んだだけ…」
結衣の表情も今起こった出来事に恐怖を感じているようだ。
奏人は割れたメガネを拾い、結衣の手を取る。

「奏人くん？」
「かな、と…？」
そして奏人は、真央に向かって口を開いた。
「…お前、もう、魔界とやらに帰れ…」
それだけ告げると、そのまま真央に背を向けて結衣と歩き出す。
ひらひらと落ちてくる葉が奏人と真央の間に真っ赤な壁を作るかのように静かに舞っていた。

第１３頁　すれ違う心（後書き）

ここまでご覧いただきましてありがとうございます！
久しぶりなのに、ほぼオールキャスト…？（あ、勇者が…）
そして、奏人と真央はどうなってしまうんですかね？
結衣ちゃんと奏人、こちらもタイトルにかかってます。
もちろん、魔王と虎太郎も。様々なすれ違い？…さあ、これからどうなって行くのでしょうか？そして次回の更新は一体いつに…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0651u/

俺が正義でお前が悪で

2011年11月24日21時46分発行